岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第659集

木戸井内Ⅵ遺跡・磯鶏石崎遺跡
発掘調査報告書

宮古西道路建設関連遺跡発掘調査

２０１６

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
（公財）岩手県文化振興事業団

木戸井内Ⅵ遺跡・磯鶏石崎遺跡
発掘調査報告書

宮古西道路建設関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。近年は、平成23年３月11日に発生した東日本大震災により甚大な被害を受けた岩手県沿岸地域において災害からの復興事業が推し進められ、これに伴う緊急発掘調査事業は増加の一途を辿りました。このような非常事態においても復興事業を進めるべく、迅速かつ精緻な記録保存措置に努めているところです。

本報告書は、宮古西道路建設事業に関連して、平成26年度に発掘調査を実施した宮古市に所在する木戸井内Ⅵ遺跡・磯鶏石崎遺跡の調査成果をまとめたものであります。

今回、木戸井内Ⅵ遺跡の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡が検出され、県内でも比較的検出例が少ない時期の集落遺跡であることから当時の生活を知るうえで貴重な事例となりました。また、磯鶏石崎遺跡では古代の竪穴住居跡を検出し、古代の集落であることが予想されました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解に繋がると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成28年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　菅野洋樹

例　言

1　本書は、岩手県宮古市に所在する木戸井内Ⅵ遺跡（宮古市松山第７地割１－１ほか）および磯鶏石崎遺跡（宮古市磯鶏第１地割石崎地内）の調査成果を収録したものである。

2　今回の発掘調査は、宮古西道路建設に伴い、岩手県教育委員会生涯学習文化課の調整を経て国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所による委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。

3　木戸井内Ⅵ遺跡の遺跡コードはLG33－2149、遺跡略号はKDNⅥ－14である。
磯鶏石崎遺跡の遺跡コードはLG34-1048、遺跡略号はSIZ-14である。

4　木戸井内Ⅵ遺跡の発掘調査期間は平成26年４月10日～５月27日、調査面積は3,240㎡、調査担当者は、福島正和・鈴木次郎（公益財団法人かながわ考古学財団派遣）・清水彩である。
磯鶏石崎遺跡の発掘調査期間は平成26年５月23日～６月30日、調査面積は618㎡、調査担当者は、福島正和・鈴木次郎（公益財団法人かながわ考古学財団派遣）・清水彩である。

5　木戸井内Ⅵ遺跡の室内整理期間は、平成26年８月１日～９月12日・平成26年12月１日～平成27年１月15日、整理担当者は福島正和である。
磯鶏石崎遺跡の室内整理期間は、平成26年９月１日～９月12日・平成27年３月２日～３月31日、整理担当者は福島正和・清水彩である。

6　本書の執筆は各担当者が分担執筆し、編集・構成を福島が担当した。

7　木戸井内Ⅵ遺跡の発掘調査に関わる基準点測量は株式会社鈴木測量設計、航空写真撮影は東邦航空株式会社にそれぞれ業務委託した。
磯鶏石崎遺跡の発掘調査に関わる基準点測量は株式会社鈴木測量設計に業務委託した。

8　両遺跡の発掘調査で検出した各種炭化物による年代測定は株式会社加速器分析研究所に業務委託した。

9　土層および土器の色調観察には、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標　準土色帖」を、地図は国土地理院発行の50,000分の1を使用した。

10　発掘調査・整理作業・報告書作成あたっては下記の方々と機関にご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する（敬称略）。
石川日出志、宇部則保、佐藤嘉広、八木光則、宮古市教育委員会

11　発掘調査による成果は、現地公開および『平成26年度発掘調査報告書』等で公表しているが、内容も含め本書を正式な報告とする。

12　今回の発掘調査による出土品および記録資料は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　　次

序
例言
報告書抄録（巻末）

〔本　　文〕

Ⅰ 経緯と経過
1 調査経緯 …… 1
2 調査経過 …… 1
（1）木戸井内Ⅵ遺跡 …… 1
（2）磯鶏石崎遺跡 …… 1

Ⅱ 位置と環境
1 遺跡の位置 …… 3
2 地質的環境 …… 3
3 歴史的環境 …… 7

Ⅲ 調査方法
1 発掘方法 …… 11
2 整理方法 …… 11
3 掲載方法 …… 12

Ⅳ 調査成果
1 木戸井内Ⅵ遺跡 …… 13
（1）概要と層序 …… 13
（2）検出遺構 …… 15
（3）出土遺物 …… 30
（4）小　結 …… 31
2 磯鶏石崎遺跡 …… 35
（1）概要と層序 …… 35
（2）検出遺構 …… 35
（3）出土遺物 …… 37
（4）小　結 …… 38

Ⅴ 総　括
1 木戸井内Ⅵ遺跡 …… 39
（1）居住と狩猟 …… 39

（２）弥生土器の基礎分析 ……40
２　磯鶏石崎遺跡 ……40
３　ま　と　め ……40

附編　放射性炭素年代測定
木戸井内Ⅵ遺跡 ……43
磯鶏石崎遺跡 ……47
測定結果を受けて ……50

〔図　　版〕

第１図　遺跡の位置……2
第２図　木戸井内Ⅵ遺跡調査範囲……4
第３図　磯鶏石崎遺跡調査範囲……5
第４図　宮古湾周辺の地形分類……6
第５図　宮古湾周辺の遺跡……8
第６図　木戸井内Ⅵ遺跡全体図……14
第７図　竪穴住居跡１……16
第８図　竪穴住居跡２……18
第９図　竪穴住居跡３……19
第10図　竪穴住居跡３石囲炉……20
第11図　貯蔵穴１……21
第12図　陥し穴１～４……23
第13図　陥し穴５～７……25
第14図　陥し穴８・９……26
第15図　炭窯１～６……28
第16図　土坑１～３……29
第17図　出土遺物（１～32）……32
第18図　出土遺物（33～65）……33
第19図　磯鶏石崎遺跡Ａ地区全体図……36
第20図　磯鶏石崎遺跡Ｂ地区全体図……37
第21図　土坑１・２……37
第22図　出土遺物（66～70）……38
第23図　周辺遺跡出土弥生後期の土器集成……41

〔　表　〕

表１　宮古湾周辺の遺跡一覧……8
表２　遺構名対照表……12
表３　掲載遺物一覧（木戸井内Ⅵ遺跡出土土器）……34

〔写真図版〕

写真図版１　航空写真【木戸井内Ⅵ遺跡】……53
写真図版２　調査前現況【木戸井内Ⅵ遺跡】……54
写真図版３　竪穴住居跡１【木戸井内Ⅵ遺跡】……55
写真図版４　竪穴住居跡１【木戸井内Ⅵ遺跡】……56
写真図版５　竪穴住居跡１【木戸井内Ⅵ遺跡】……57
写真図版６　竪穴住居跡１【木戸井内Ⅵ遺跡】……58
写真図版７　竪穴住居跡２【木戸井内Ⅵ遺跡】……59
写真図版８　竪穴住居跡３【木戸井内Ⅵ遺跡】……60
写真図版９　竪穴住居跡３【木戸井内Ⅵ遺跡】……61
写真図版10　貯蔵穴１、陥し穴１～３【木戸井内Ⅵ遺跡】……62
写真図版11　陥し穴４～７【木戸井内Ⅵ遺跡】……63
写真図版12　陥し穴８・９、炭窯１・２【木戸井内Ⅵ遺跡】……64
写真図版13　炭窯３～６【木戸井内Ⅵ遺跡】……65
写真図版14　土坑１～３、現地公開風景【木戸井内Ⅵ遺跡】……66
写真図版15　Ａ地区【磯鶏石崎遺跡】……67
写真図版16　Ｂ地区【磯鶏石崎遺跡】……68
写真図版17　出土遺物１～27【木戸井内Ⅵ遺跡】……69

写真図版18　出土遺物28～58【木戸井内Ⅵ遺跡】……70
写真図版19　出土遺物57～66【木戸井内Ⅵ遺跡】、
出土遺物67～70【磯前石崎遺跡】……71

Ⅰ 経緯と経過

1 調査経緯

木戸井内Ⅵ遺跡および磯鶏石崎遺跡は、一般国道106号宮古盛岡横断道路事業(宮古西道路)の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

宮古盛岡横断道路は、宮古市と盛岡市を結ぶ延長約100㎞の地域高規格道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興支援道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年４月12日付け国東整陸一調第７号、第12号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年４月18日～４月24日、５月13日～５月15日にわたり試掘調査を行い、平成25年５月27日付け教生第285号、第288号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年４月１日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

2 調査経過

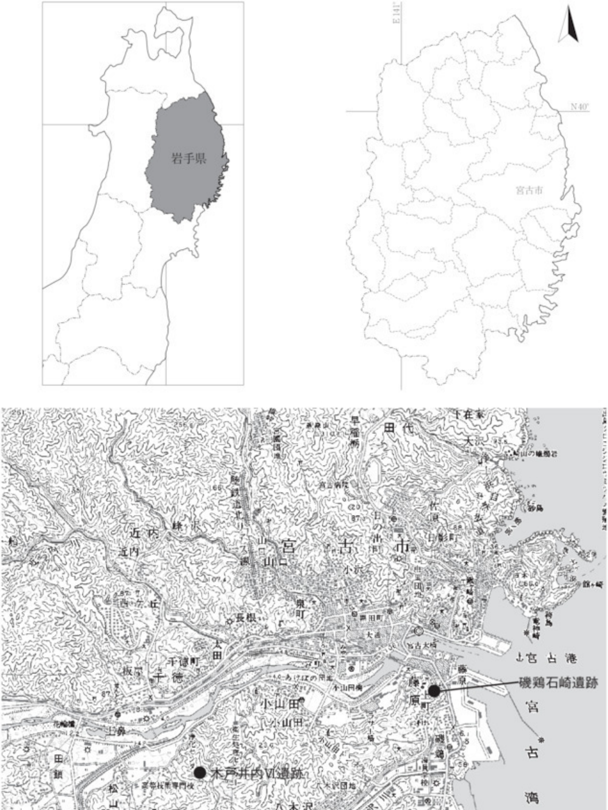
(1)木戸井内Ⅵ遺跡

平成26年４月10日に現地での調査を開始した。４月10日は調査資材の搬入および環境整備をおこない、翌11日から発掘調査をおこなった。調査を進めると、想定していた以外の遺構種別があることがわかり、調査期間の延長を余儀なくされた。５月17日午前には現地公開を開催し、広く一般への公開をおこなった。当日は高低差のある調査地にも関わらず近隣住民の方々を中心に64人の参加があった。その後、５月27日に調査を終了し、５月28日には航空写真の撮影をおこなった。

(2)磯鶏石崎遺跡

平成26年５月23日に調査を開始した。遺跡の調査範囲はＡ地区・Ｂ地区の２箇所に離れて存在し、環境整備が整っていた国道45号に近接するＢ地区から先行して着手することとした。調査開始日当日はこのＢ地区の単管パイプによる防護策の設置作業を業務委託して実施した。翌週から重機によるＢ地区の表土除去をおこない、続けて人力による遺構検出をおこなった。その後、Ａ地区の表土除去を開始し、併行して遺構検出作業をおこなっていたが、その作業途上で、三陸国道事務所から岩手県教育委員会に対し設計変更に伴う工法協議がなされた(平成26年６月13日付け：国東整陸一調第15号)。その結果、平成26年6月13日付け：教生第535号により、Ａ地区のトンネル築造工事範囲外で遺跡が現状保存されること、併せて設計変更が生ずる以前まで遺構検出を進めていた箇所については確認調査とすることに変更された。今回の発掘調査はＢ地区の設定範囲を終了させ、Ａ地区は掘削による現状変更となった範囲の記録保存をおこない、６月30日にすべての作業を終え撤収した。

(福島)



第１図　遺跡の位置

Ⅱ 位置と環境

1 遺跡の位置

木戸井内Ⅵ遺跡は岩手県宮古市松山第７地割１－１、磯鶏石崎遺跡は宮古市磯鶏第１地割石崎地内にそれぞれ所在する。

両遺跡の所在する宮古市は岩手県最東部に位置し、市域西側は北上山地、東側は三陸海岸、太平洋にそれぞれ面する。宮古市は昭和16年宮古町、千徳村、山口村、磯鶏村の１町３村が合併して市制を開始した。昭和30年この宮古市と花輪村､津軽石村､崎山村､重茂村の１市４村の合併がおこなわれた。平成17年には田老町、新里村と、平成22年には川井村とそれぞれ合併し、現在の市域となった。この広域合併の結果､1259.89㎢の広大な面積を有する市となり、人口56,854人(平成26年12月１日現在)を擁している。宮古市は北部で下閉伊郡岩泉町、南部で下閉伊郡山田町、遠野市、上閉伊郡大槌町、南西部花巻市、西部で盛岡市とそれぞれ市域が接している。主要な産業は、宮古湾を漁場とした水産業、北上山地の森林資源を利用した木材加工業等が盛んである。気候は温暖湿潤気候であるが、夏は涼しく、冬は比較的温暖である。市域の東西方向へ流れる２級河川の閉伊川は宮古湾に注ぎ出ており、河口付近北岸に宮古市中心市街地広がっている。また、閉伊川河口北側には宮古港の港湾施設が築かれている。

木戸井内Ⅵ遺跡の所在する松山地区は、宮古市街地から閉伊川を越えた対岸に位置する。閉伊川南岸に沿って走る県道277号と閉伊川を渡る国道45号宮古道路がそれぞれ松山地区へのアクセスルートとなっている。遺跡近隣には宮古浄化センター、宮古市墓園、みやこ斎苑等の諸施設が所在する。

磯鶏石崎遺跡の所在する磯鶏地区は、閉伊川の河口の南岸、宮古湾に面した位置にある。磯鶏地区は、宮古市街地から国道45号が南北に走り、西の松山地区方面から県道277号が繋がっている。遺跡の東端部は、国道45号に近接し、尾根上から宮古湾と重茂半島を眺望できる。また、震災により現在休止中であるがJR山田線磯鶏駅があり、遺跡は駅の北側に位置する。

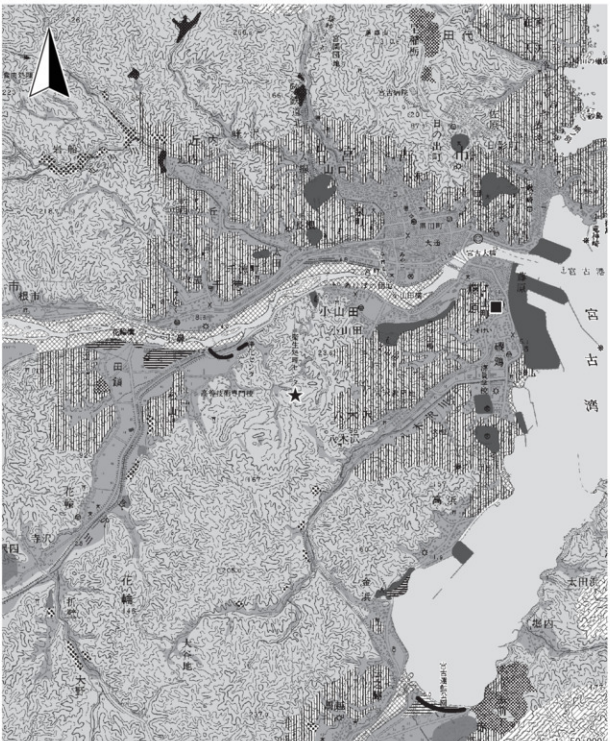
2 地質的環境

宮古市中心部は、東側の宮古湾に面する一帯である。この一帯を区界峠付近に源流を持つ閉伊川が西から東へ流れ、市内を流れる近内川、山口川、長沢川、八木沢川等の支流を集め宮古湾に注ぎ込む。これら河川によって開析された平野部および自然堤防は狭小であり、これに沿うように丘陵地が立ち上がり、その背後にはそれらより標高の高い山地が広がっている。丘陵部は複雑に入り組んだ地形を形成しており、磁鉄鉱を多く含む宮古花崗岩によって構成されている。宮古花崗岩は白亜紀の花崗閃緑岩からトナール岩を主体とし、閉伊川を中心に南北に分布している。

木戸井内Ⅵ遺跡および磯鶏石崎遺跡は、いずれも閉伊川南岸に分布する小起伏山地から丘陵地上に立地する。木戸井内Ⅵ遺跡は狭小な沢地を挟んだ小起伏山地にあり、この沢地は閉伊川の氾濫原に当たる平野に向けて延びている。現在遺跡の立地する尾根の端部は、宮古市墓園の造成によって切り土され、山肌が露出した状態であるが、今でもこの沢地は湧水が認められる。一方、磯鶏石崎遺跡は宮古湾に向けて突き出した丘陵上に立地する。尾根筋は複雑に入り組み、大小の高低差を持ちながら概ね東西方向へ延びる

第２図　木戸井内Ⅵ遺跡調査範囲

第３図　磯鶏石崎遺跡調査範囲



第４図　宮古湾周辺の地形分類

3　歴史的環境

木戸井内Ⅵ遺跡および磯鶏石崎遺跡が所在する宮古湾周辺地域では、これまで多くの遺跡が確認されている。これらのうち内容が明らかになっている遺跡を中心に紹介する。

縄文時代では、早期から晩期に至る遺跡が多数確認されている。縄文時代早期の遺跡は未だ数が少ない状況であるが、前期には遺跡数が増加する状況は県内の他地域と同様である。特筆すべき縄文時代前期の調査成果として、前期初頭の大規模な集落遺跡である千鶏遺跡が挙げられる。30棟以上の竪穴住居跡が南向きの緩斜面で検出されている。中期になるとさらに遺跡数が増え、国指定史跡である崎山貝塚など大規模な集落が宮古湾周辺の各地で営まれる。磯鶏石崎遺跡の付近では上村貝塚で中期中葉～後葉の竪穴住居跡が11棟調査されている。住居跡以外では土器埋設遺構や複数人分の人骨が同一箇所から出土した墓壙も調査されている。後期後半～晩期前半にかけての集落である近内中村遺跡では、多数の墓壙が調査されている。特に、獣骨（イヌ）が人骨と一緒に埋葬された墓壙はきわめて稀な事例として注目される。

弥生時代の遺跡は限られており、さらに発掘調査等によってその内容が明らかになっている遺跡は数少ない。明確な集落として磯鶏石崎遺跡に近在する上村貝塚で前期の竪穴住居跡が5棟調査されている。宮古湾周辺では中期・後期の遺構は調査されていないが、土器片等は各地でわずかながら散見される。木戸井内Ⅵ遺跡周辺では、やはり当該期の遺構はみられないが、隠里Ⅷ遺跡で弥生時代後期の土器が比較的まとまって出土している。

奈良・平安時代になると再び遺跡数の増加が認められる。木戸井内Ⅵ遺跡の所在する松山地区では、松山大地田沢遺跡・木戸井内Ⅳ遺跡・隠里Ⅲ遺跡等が古代の集落として調査されている。磯鶏石崎遺跡が所在する磯鶏地区では磯鶏館山遺跡・上村貝塚などの遺跡で古代の集落が調査されている。また、両遺跡の南に位置する島田Ⅱ遺跡は鉄生産を主とする大規模な集落として注目される。

中世は各水系に付随する要所となる高台において城館が認められる。松山地区には松山館跡、磯鶏地区には磯鶏館山遺跡などが発掘調査されている。

（福島）

引用・参考文献

宮古市教育委員会　1986　『宮古市埋蔵文化財調査報告書９　宮古市遺跡分布図』
宮古市教育委員会　1990　『磯鶏館山遺跡』
宮古市教育委員会　2006　『宮古市埋蔵文化財調査報告書68　木戸井内Ⅳ遺跡』
岩手日報社　2000　『いわて未来への遺産　遺跡は語る　旧石器～古墳時代』
（以下）財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター埋蔵文化財調査報告書
1991　『第158集　上村貝塚発掘調査報告書』
1999　『第450集　島田Ⅱ遺跡第２～４次発掘調査報告書』
2008　『第511集　賽の神Ⅱ遺跡・賽の神遺跡・下大谷地Ⅰ遺跡・八木沢野来遺跡第１次発掘調査報告書』
2009　『第529集　木戸井内Ⅳ遺跡・隠里Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
2010　『第552集　隠里Ⅷ遺跡発掘調査報告書』
2010　『第558集　松山大地田沢遺跡発掘調査報告書』
2014　『第625集　松山館跡発掘調査報告書』

	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	時代	種別
19	LG34-1027	藤原上町Ⅱ	ふじわらかみまちⅡ	奈良	集落跡
20	LG34-1048	磯鶏石崎	そけいいしざき	縄文・古代	散布地
24	LG34-1085	上村貝塚	わむらかいづか	縄文～平安	集落跡・貝塚
26	LG34-2007	磯鶏蝦夷森貝塚	そけいえぞもりかいづか	縄文・古代	貝塚
96	LG34-2001	磯鶏竹洞Ⅰ	そけいたけほらⅠ	平安・古代	集落跡
106	LG43-0205	八木沢Ⅱ	やぎさわⅡ	縄文	散布地
108	LG43-0269	八木沢ラントノ沢Ⅱ	やぎさわらんとのさわⅡ	縄文	
109	LG43-0279	八木沢ラントノ沢Ⅰ	やぎさわらんとのさわⅠ	縄文	
110	LG43-1206	八木沢駒込Ⅰ	やぎさわこまごめⅠ	縄文・古代	集落跡

	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	時代	種別
148	LG33-1273	木戸井内	きどいない	縄文	散布地
149	LG33-2214	木戸井内Ⅱ	きどいないⅡ	古代	散布地
150	LG33-2227	木戸井内Ⅲ	きどいないⅢ	古代・弥生	散布地
151	LG33-2263	木戸井内Ⅳ	きどいないⅣ	古代・縄文	集落跡
152	LG33-1280	木戸井内Ⅴ	きどいないⅤ	奈良	集落跡
153	LG33-2149	木戸井内Ⅵ	きどいないⅥ	縄文	散布地
154	LG33-2260	隠里Ⅷ	かくれざとⅧ	縄文	散布地
155	LG33-2166	松山大地田沢	まつやまおおちださわ	古代	集落跡
157	LG33-2292	隠里Ⅲ	かくれざとⅢ	縄文・古代	集落跡

第５図　宮古湾周辺の遺跡

	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	時代	種別
1	LG24-0177	長磯	ながいそ	縄文	散布地
2	LG24-0142	塚場	つかば	縄文	散布地
3	LG24-0057	大石	おおいし	縄文	散布地
4	LG24-1166	平松Ⅰ	ひらまつⅠ	縄文	集落跡
5	LG24-1184	平松Ⅱ	ひらまつⅡ	縄文	散布地
6	LG24-1187	平松Ⅲ	ひらまつⅢ	縄文	散布地
7	LG24-2158	井戸ケ洞	いとがほら	縄文	集落跡
8	LG24-1069	佐原	さばら	縄文	集落跡
9	LG24-2111	熊野町	くまのちょう	中世	番屋跡？
10	LG24-2150	日影町Ⅰ	ひかげちょうⅠ	縄文	散布地
11	LG24-2173	日影町Ⅱ	ひかげちょうⅡ		散布地
12	LG24-2184	鍬ケ崎館(館山)	くわがさきたて	中世	城館跡
		鍬ケ崎館山貝塚	くわがさきたてやまかいづか	縄文～中世	集落跡・貝塚
13	LG24-2190	小山根	こやまね	縄文・弥生・古代	散布地
14	LG34-0104	鍬ケ崎仲町	くわがさきなかまち	縄文	散布地
15	LG34-0123	夏保	なつぼ	縄文	散布地
16	LG34-0124	鍬ケ崎上町	くわがさきかみまち	縄文	散布地
17	LG34-0144	光岸地	こうがんぢ	縄文	集落跡・貝塚
18	LG34-1007	藤原上町Ⅰ	ふじわらかみまちⅠ	縄文・古代	散布地
21	LG34-1045	藤原上町Ⅲ	ふじわらかみまちⅢ	縄文・古代	散布地
22	LG34-1075	早坂	はやさか	縄文・弥生・古代	貝塚
23	LG34-1073	小沢田	こさわだ	縄文・古代	貝塚
25	LG34-1084	上村Ⅱ	わむらⅡ	縄文・古代	散布地
27	LG34-2123	磯鶏沖	そけいおき	近世・中世	城館跡・台場
28	LG34-2155	磯鶏館山	そけいたてやま	縄文～中世	集落跡・城館跡
29	LG34-2076	仏沢Ⅰ	ほとけざわⅠ	古代	散布地
30	LG34-2097	仏沢Ⅱ	ほとけざわⅡ	縄文・平安	集落跡
31	LG44-0003	磯鶏中谷地	そけいなかやち	古代	散布地
32	LG34-2091	島田Ⅰ	しまだⅠ	平安	集落跡
33	LG43-0338	島田Ⅱ	しまだⅡ	古代	集落跡
34	LG43-0357	八木沢古館	やぎさわふるたて	中世	城館跡
35	LG43-0364	八木沢中田	やぎさわなかた	近世	
36	LG44-0095	高浜Ⅰ坂ノ下	たかはまⅠさかのした	縄文	散布地
37	LG44-1013	高浜Ⅱ今ヶ洞	たかはまⅡいまがほら	縄文	散布地
38	LG44-1032	高浜Ⅲ熊野	たかはまⅢくまの	縄文	散布地
39	LG43-1369	高浜Ⅳ横須賀	たかはまⅣよこすか	縄文	散布地
40	LG44-1271	白浜太田浜Ⅲ	しらはまおおたはまⅢ	縄文	散布地
41	LG44-1282	白浜太田浜Ⅳ	しらはまおおたはまⅣ	縄文	散布地
42	LG44-1290	白浜太田浜Ⅴ	しらはまおおたはまⅤ	縄文	散布地
43	LG44-2155	堀内Ⅰ	ほりないⅠ	縄文	散布地
44	LG44-2167	堀内Ⅱ	ほりないⅡ	縄文	散布地
45	LG44-2290	堀内Ⅲ	ほりないⅢ	縄文	散布地
46	LG44-2176	堀内Ⅴ	ほりないⅤ	縄文	散布地
47	LG44-2195	堀内Ⅳ	ほりないⅣ	縄文	散布地
48	LG54-0113	小堀内Ⅰ	こぼりないⅠ	縄文・弥生・奈良	集落跡
49	LG54-0123	小堀内Ⅱ	こぼりないⅡ	縄文	散布地
50	LG54-0142	小堀内Ⅲ	こぼりないⅢ		散布地
51	LG54-0160	赤前Ⅵ釜屋ヶ沢	あかまえⅥかまやがさわ	縄文・古代・近世	散布地
52	LG54-0089	赤前Ⅴ柳沢	あかまえⅤやなぎさわ	縄文・古代	散布地
53	LG54-1008	赤前Ⅳ八枚田	あかまえⅣはちまいた	縄文・平安	集落跡
54	LG54-1025	赤前Ⅲ	あかまえⅢ	縄文・平安	集落跡
55	LG54-1064	赤前館	あかまえたて	中世	城館跡
56	LG54-1072	赤前Ⅰ牛子沢	あかまえⅠうしこざわ	縄文	散布地
57	LG53-1389	久保田	くぼた	縄文・古代	散布地
58	LG43-1398	高浜Ⅴ下地神	たかはまⅤしもじのかみ	縄文	散布地
59	LG43-2316	高浜Ⅵ地神	たかはまⅥちのかみ	縄文	散布地
60	LG43-2314	金浜堤ケ沢	かねはまつつみがさわ		製鉄跡
61	LG43-2335	金浜館	かねはまたて	中世・縄文	城館跡
62	LG43-2342	金浜Ⅰ	かねはまⅠ	縄文・平安	散布地
63	LG43-2363	金浜Ⅱ	かねはまⅡ	古代	集落跡
64	LG43-2384	金浜Ⅲ	かねはまⅢ	縄文・古代	散布地
65	LG43-2394	金浜Ⅳ	かねはまⅣ	縄文	散布地
66	LG53-0313	金浜Ⅴ	かねはまⅤ	縄文	散布地
67	LG53-0246	馬越Ⅱ	まごしⅡ	古代	集落跡
68	LG53-0268	馬越Ⅰ	まごしⅠ	縄文・古代	散布地
69	LG53-0382	山崎館	やまざきたて	中世	城館跡
70	LG53-1207	津軽石大森	つがるいしおおもり	縄文	散布地
71	LG53-1225	沼里	ぬまり	縄文・奈良	集落跡
72	LG53-1266	沼里館	ぬまりたて	中世	城館跡
73	LG53-1273	根井沢穴田Ⅰ	ねいさわあなたⅠ	縄文・古代	散布地
74	LG53-1281	根井沢穴田Ⅱ	ねいさわあなたⅡ	縄文	散布地
75	LG53-1290	根井沢穴田Ⅲ	ねいさわあなたⅢ	縄文	散布地
76	LG24-0040	早稲栃糠森	わせとちぬかもり	縄文	散布地
77	LG23-0369	早稲栃Ⅲ	わせとちⅢ	縄文	散布地
78	LG24-0081	早稲栃Ⅳ	わせとちⅣ		散布地
79	LG24-1000	南沢Ⅰ	みなみざわⅠ		散布地
80	LG24-1010	早稲栃Ⅴ	わせとちⅤ	縄文	散布地
81	LG24-1020	早稲栃Ⅵ	わせとちⅥ	縄文	散布地
82	LG23-1349	寒風	さむかぜ	縄文・古代	集落跡
83	LG24-1082	佐原Ⅱ	さばらⅡ	縄文・奈良・平安・近世	散布地
84	LG24-2003	日の出町Ⅰ	ひのでちょうⅠ	縄文	散布地
85	LG24-2033	日の出町Ⅱ	ひのでちょうⅡ	縄文	散布地
86	LG24-2044	日の出町Ⅲ	ひのでちょうⅢ	縄文	散布地
87	LG24-2076	沢田Ⅰ	さわだⅠ	古代	散布地
88	LG24-2087	沢田Ⅱ	さわだⅡ		散布地
89	LG34-0025	黒田館	くろたたて	中世	城館跡
90	LG24-2080	小沢Ⅱ大上	こざわⅡおおうえ	縄文	散布地
91	LG23-2377	小沢貝塚	こざわかいづか	縄文	貝塚
92	LG33-0385	横山	よこやま	古代	集落跡・貝塚
93	LG33-1389	小山田Ⅲ	こやまだⅢ	中世	城館跡
94	LG34-1091	上村Ⅳ	わむらⅣ	縄文・古代	散布地
95	LG33-2306	小山田Ⅱ	こやまだⅡ	古代	散布地
97	LG34-2013	上村Ⅲ	わむらⅢ	縄文・古代	散布地
98	LG33-2349	磯鶏竹洞Ⅱ	そけいたけほらⅡ	縄文・古代	集落跡
99	LG33-2344	猿楽峠	さるがくとうげ	古代・縄文	散布地
100	LG33-2372	八木沢守ノ越Ⅲ	やぎさわもりのこしⅢ	縄文・古代	散布地
101	LG33-2351	八木沢守ノ越Ⅳ	やぎさわもりのこしⅣ	縄文・古代・弥生	散布地
102	LG43-0312	八木沢新館	やぎさわしんだて	中世・近世	城館跡
103	LG43-0310	八木沢守ノ越Ⅰ	やぎさわもりのこしⅠ	縄文	散布地
104	LG33-2288	八木沢守ノ越Ⅱ	やぎさわもりのこしⅡ	縄文	散布地
105	LG43-0330	八木沢Ⅰ白山下	やぎさわⅠはくさんした	縄文	散布地
107	LG43-0238	八木沢Ⅲ	やぎさわⅢ	古代	生産遺跡
111	LG43-1244	八木沢駒込Ⅱ	やぎさわこまごめⅡ	縄文	散布地
112	LG43-1257	八木沢野来	やぎさわのうらい	縄文	集落跡
113	LG43-2209	賽の神	さいのかみ	縄文	散布地
114	LG43-2206	下大谷地Ⅰ	しもおおやち1	縄文	散布地
115	LG43-2204	下大谷地Ⅱ	しもおおやちⅡ	縄文	集落跡
116	LG43-2222	下大谷地Ⅲ	しもおおやちⅢ	縄文	散布地
117	LG43-2233	下大谷地Ⅳ	しもおおやちⅣ	縄文	散布地
118	LG43-2264	下大谷地Ⅴ	しもおおやちⅤ	縄文	散布地
119	LG23-1326	黒森	くろもり		散布地
120	LG23-1332	黒森山	くろもりさん		寺院跡
121	LG23-1364	黒森マギ沢	くろもりまぎさわ	縄文	散布地
122	LG23-2318	小沢Ⅵ	こざわⅥ	縄文	集落跡
123	LG23-2325	小沢Ⅴ神竈石	こざわⅤかごいし	縄文・古代	散布地・祭祀跡
124	LG23-2336	小沢Ⅳ人形鼻		縄文・古代	散布地
125	LG23-2346	小沢Ⅲ石倉平	こざわⅢいしくらだいら	縄文	散布地
126	LG23-2323	拝殿峠	はいでんとうげ	縄文	集落跡
127	LG23-2310	山口館(館山)	やまぐちたて	中世・古代	城館跡
128	LG23-2353	拝殿ケ沢	はいでんがさわ	縄文・古代	散布地
129	LG23-2362	黒森町Ⅰ	くろもりちょうⅠ	近世	屋敷跡・鋳造遺跡

	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	時代	種別
130	LG33-0323	鴨崎Ⅱ	かもざきⅡ	古代	散布地
131	LG33-0312	鴨崎Ⅰ	かもざきⅠ	古代	集落跡
132	LG33-0218	泉町狐崎Ⅱ	いずみちょうきつねざきⅡ	縄文・奈良・平安	集落跡
133	LG33-0321		いずみちょうきつねざきⅠ	古代	散布地
134	LG33-0207	狐崎	きつねざき	縄文・奈良・平安	集落跡
135	LG33-0340	笠間館	かさまたて	中世	城館跡
136	LG33-0229	泉町狐崎Ⅲ	いずみちょうきつねざきⅢ		散布地
137	LG33-0226	長根Ⅴ	ながねⅤ		散布地
138	LG33-0248	長根寺Ⅱ	ちょうこんじⅡ	縄文・古代	散布地
139	LG33-0237	長根寺Ⅰ	ちょうこんじⅠ		集落跡
140	LG33-0225	長根Ⅳ	ながねⅣ		散布地
141	LG33-0235	長根Ⅲ	ながねⅢ	古代	散布地
142	LG33-0258	長根寺Ⅲ	ちょうこんじⅢ		散布地
143	LG33-0256	長根Ⅱ	ながねⅡ	古代	散布地
144	LG33-0253	長根Ⅰ	ながねⅠ	弥生～中世	群集墳
145	LG33-1237	岩ケ沢	いわがさわ	縄文・古代	散布地
146	LG33-1370	小山田館	こやまだたて	中世	城館跡
147	LG33-1380	小山田Ⅰ	こやまだⅠ	古代	散布地
156	LG33-2162	松山下谷地	まつやましもやち	縄文・古代	散布地
158	LG33-2280	隠里Ⅱ	かくれざとⅡ	縄文・古代	集落跡
159	LG33-2197	隠里Ⅰ	かくれざとⅠ	縄文・古代	集落跡
160	LG43-0200	隠里Ⅳ	かくれざとⅣ	縄文・古代	散布地
161	LG43-0212	隠里Ⅴ	かくれざとⅤ	古代	散布地
162	LG43-0230	隠里Ⅵ	かくれざとⅥ	古代	散布地
163	LG43-0138	隠里Ⅶ	かくれざとⅦ		散布地
164	LG43-0102	七所沢Ⅰ	しっしょざわⅠ	古代	散布地
165	LG43-0122	七所沢Ⅱ	しっしょざわⅡ	縄文	散布地
166	LG43-0163	七所沢Ⅲ	しっしょざわⅢ	縄文	散布地
167	LG33-2086	松山館	まつやまたて	古代・中世	城館跡
168	LG43-0044	真木田	まきた	縄文	散布地
169	LG23-1216	小平Ⅲ	こだいらⅢ	縄文	散布地
170	LG23-1233	牛沢	うしざわ	縄文	散布地
171	LG23-1234	小平Ⅱ	こだいらⅡ	縄文	散布地
172	LG23-1255	小平Ⅰ	こだいらⅠ	縄文	散布地
173	LG23-1295	赤畑東	あかばたけひがし	縄文・近世	散布地
174	LG23-1253	高根	こうね	縄文	土壙墓群
175	LG23-2215	赤畑	あかばたけ	縄文・近世	集落跡
176	LG23-2246	天神山	てんじんやま	縄文・古代・弥生	散布地
177	LG23-2244	山口駒込Ⅰ	やまぐちこまごめⅠ	縄文・奈良	集落跡
178	LG23-2231	山口駒込Ⅱ	やまぐちこまごめⅡ		集落跡
179	LG23-2282	延所	のべどころ	縄文	散布地
180	LG33-0213	青猿Ⅲ	あおざるⅢ	縄文・古代	散布地
181	LG33-0222	青猿Ⅱ	あおざるⅡ	弥生・平安	集落跡
182	LG33-0221	青猿Ⅰ	あおざるⅠ	縄文・平安	集落跡・製鉄跡
183	LG33-0149	近内寺本Ⅱ	ちかないてらもとⅡ	古代	散布地
184	LG33-0138	近内寺本Ⅰ	ちかないてらもとⅠ	縄文・古代	散布地
185	LG23-2197	近内白石Ⅱ	ちかないしろいしⅡ	縄文・古代	散布地
186	LG23-2196	近内大館	ちかないおおだて	中世	城館跡
187	LG23-2194	近内白石Ⅰ	ちかないしろいしⅠ		製鉄跡
188	LG33-0197	千徳城遺跡群	せんとくじょういせきぐん	奈良・平安・中世	城館跡
189	LG33-0099	神田沢	かんだざわ	縄文・古代	散布地
190	LG33-0087	室井沢Ⅰ	むろいざわⅠ	縄文・古代	散布地
191	LG33-1008	室井沢Ⅱ	むろいさわⅡ		散布地
192	LG33-1019	板屋Ⅰ	いたやⅠ		散布地
193	LG33-1121	板屋Ⅱ	いたやⅡ		散布地
194	LG23-0078	黒石沢	くろいしざわ	縄文・古代	散布地
195	LG23-1121	蜂ケ沢Ⅳ	ばちがさわⅣ		散布地
196	LG23-1151	蜂ケ沢Ⅲ	ばちがさわⅢ		散布地
197	LG23-1068	蜂ケ沢Ⅱ	ばちがさわⅡ		散布地
198	LG23-2104	蜂ケ沢Ⅰ	ばちがさわⅠ	縄文・古代	集落跡

	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	時代	種別
199	LG23-2133	近内踊場	ちかないおどりば		散布地
200	LG23-2162	近内館	ちかないたて	中世	城館跡
201	LG23-2059	近内中村	ちかないなかむら	縄文・弥生・古代	集落跡
202	LG23-2055	横川	よこかわ	縄文・古代	散布地
203	LG23-2024	菅ノ沢	すげのさわ	縄文・古代	集落跡
204	LG23-1042	アサナイ沢	あさないざわ	縄文・古代	散布地
205	LG22-1365	柵館Ⅲ	さくだてⅢ	縄文・弥生・古代	散布地
206	LG22-1388	柵館Ⅱ	さくだてⅡ	縄文	散布地
207	LG23-2021	柵館Ⅰ	さくだてⅠ	縄文	散布地
208	LG22-2347	与茂子Ⅰ	よものこⅠ	縄文	散布地
209	LG22-2385	与茂子Ⅱ	よものこⅡ		散布地
210	LG22-2387	桜木	さくらぎ	縄文・古代	散布地
211	LG32-1335	下根市	しもねいち	縄文	散布地
212	LG32-1331	板の沢	いたのさわ	縄文	散布地
213	LG32-1258	根市館	ねいちたて	中世	城館跡
214	LG32-1235	根市寺沢Ⅱ	ねいちてらざわⅡ	縄文	散布地
215	LG33-2040	田鎖車堂前	たくさりくるまどうまえ	縄文・古代	散布地
216	LG32-2358	田鎖	たくさり	縄文・古代	散布地
217	LG32-2333	田鎖館（三合並館）	たくさりたて（さんごうなみたて）	中世	城館跡
218	LG32-2248	老木館	ろうきたて	中世	城館跡
219	LG32-2393	袴沢	はかまざわ		散布地
220	LG42-0234	老木西根	ろうきにしね	縄文	散布地
221	LG42-0265	老木南沢	ろうきみなみざわ	縄文	散布地
222	LG42-0355	鰹沢	かつおざわ	平安・奈良	集落跡
223	LG42-0384	花輪館（エゾ館）	はなわたて	中世	城館跡
224	LG42-1312	程久保	ほどくぼ	中世	城館跡
225	LG42-1237	寺沢Ⅱ	てらざわⅡ	縄文	散布地
226	LG42-1257	寺沢Ⅰ	てらざわⅠ	縄文	散布地
227	LG42-1276	長沢館（御所館・川戸館）	ながさわたて	中世	城館跡
228	LG43-1012	向沢	むかいさわ	縄文・平安	散布地
229	LG43-1040	鱒沢館	ますざわたて	中世	城館跡
230	LG43-1042	鱒沢Ⅰ	ますざわⅠ		集落跡
231	LG43-1073	鱒沢Ⅱ	ますざわⅡ	縄文	散布地
232	LG43-2147	下大谷地Ⅵ	しもおおやちⅥ	縄文	散布地
233	LG43-2143	大谷地Ⅰ	おおやちⅠ	縄文	散布地
234	LG43-2170	大谷地Ⅱ	おおやちⅡ	縄文	集落跡
235	LG43-2068	大谷地Ⅲ	おおやちⅢ		散布地
236	LG43-2076	大谷地Ⅳ	おおやちⅣ	縄文	散布地
237	LG53-0027	大谷地Ⅴ	おおやちⅤ	縄文	散布地
238	LG42-2398	下大野Ⅰ	しもおおのⅠ	縄文	散布地
239	LG52-0328	下大野Ⅱ	しもおおのⅡ		散布地
240	LG52-0336	中大野Ⅰ	なかおおのⅠ		散布地
241	LG52-0347	中大野Ⅱ	なかおおのⅡ		散布地
242	LG42-1395	下折壁Ⅱ	しもおりかべⅡ	中世	城館跡
243	LG42-2326	下折壁Ⅰ	しもおりかべⅠ	縄文	散布地
244	LG42-2314	ミヤナリ沢	みやなりさわ	縄文	散布地
245	LG42-2249	折壁館	おりかべたて	中世	城館跡
246	LG42-2391	中折壁Ⅰ	なかおりかべⅠ	縄文	散布地
247	LG52-0300	折壁Ⅱ	おりかべⅡ	縄文	散布地
248	LG52-0321	中折壁Ⅱ	なかおりかべⅡ		散布地
249	LG52-0357	上大野Ⅰ	かみおおのⅠ	縄文	集落跡
250	LG53-0060	長沢横街道Ⅰ	ながさわよこかいどうⅠ	縄文	散布地
251	LG52-0379	長沢横街道Ⅱ	ながさわよこかいどうⅡ		散布地
252	LG53-0072	長沢横街道Ⅲ	ながさわよこかいどうⅢ	縄文	散布地
253	LG52-0387	上大野Ⅱ	かみおおのⅡ	縄文	散布地
254	LG52-1306	上大野Ⅳ	かみおおのⅣ	古代	散布地
255	LG52-1317	上大野Ⅲ	かみおおのⅢ		散布地

Ⅲ 調 査 方 法

1 発 掘 調 査

木戸井内Ⅵ遺跡および磯鶏石崎遺跡は、いずれも丘陵尾根上に立地することから安全で効率的に発掘調査を進めるため様々な工夫を凝らした。

掘削作業

いずれの調査地も調査前は山林であったことから、事前におこなわれた伐採作業によって生じた枝葉が調査区に散乱していた。調査はこれら雑物を人力によって撤去し、隠れている表土面を露出させる作業からおこない、必要に応じて人力によるトレンチを数箇所設定し、初期段階での層位および遺構の把握をおこなった。このトレンチの結果を加味しながら、その後は重機により表土除去を実施したが、いずれも狭小な尾根上での作業となるため安全に留意した。重機による掘削が終了した部分については、人力による遺構検出作業をおこなった。検出した遺構の掘削作業は２分法あるいは４分法で掘削し、その状況を記録、残りの部分の掘削という流れで作業を進めた。ただし、磯鶏石崎遺跡A地区は表土除去途中の段階での記録保存となったため、表土除去を終えた部分の遺構検出までに留めた。

遺構実測・写真撮影

遺構実測は、電子平板による遺構平面図を作成し、遺構断面図は手描きによる実測方法を採用した。また、遺構の写真撮影は、一眼レフデジタルカメラによる撮影を基本とし、６×７判モノクロによる写真を保存用として適宜撮影した。撮影に際しては、撮影カードの記入・写し込みをおこない、撮影写真の整理に活用した。

諸記録の表記

調査に際して、木戸井内Ⅵ遺跡(KDNⅥ-14)、磯鶏石崎遺跡(SIZ-14)と各遺跡名および調査年を略号で表現した。調査で記録したものすべてが、この略号によって管理されている。

遺構名については、調査においては汎用的な遺構略号を用いた。遺構略号は竪穴住居跡や竪穴建物跡を「SI」、独立した土坑を「SK」、独立した柱穴を「SP」、独立した焼土遺構を「SF」、不明遺構を「SX」とし、これら種別毎に「01」から番号を付与した。なお、竪穴住居跡に属する施設と考えられる遺構については、主体遺構名の後に「-」を付け、種別によって「S」と「0」を外して表現している。すなわち、今回の調査で検出した「竪穴住居跡１」内にある付属遺構の柱穴については「SI01-P1」となる。

2 整 理 作 業

発掘調査終了後の整理作業は、当センターの室内で行った。

遺構実測図・写真

遺構実測図はデータを基に編集し、遺構図版としての体裁を整えた。この作業は発掘現場で取得した点のデータを基に作成しており、これら各測点は変更せず必要な点や線を加えて整えた。これらのデータの座標値等はデータとしても保存している。発掘調査現場で撮影した写真は、デジタル写真データは台帳を作成し、データ毎フォルダ整理をおこなった。これらは遺構毎に分類してある。また、ネガフィルムについては、それぞれアルバムによる整理をおこなった。

出土遺物

すべて洗浄および注記を行い、その過程を経たものの接合作業を行った。これらの内、本書に掲載する遺物を選択し、実測と写真撮影をおこなった。選択基準は、実測可能な残存状態の良いもの原則とし、土器類の破片については、特徴から時期や土器型式が判明するもの、口縁部のあるものを中心とした。遺物の実測作業は、原寸での作業を基本とした。原寸で行った実測図は、縮尺を整えトレースを行い、図版用の版下を作成した。また、縄文土器・弥生土器の器表面は湿拓により拓本とした。遺物の写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを用いて当センター内にある写場でおこない、撮影したデータは編集し、写真図版として本書に掲載した。

保管・収納

すべての処理が終了した記録類および遺物は、県立埋蔵文化財センター所定の場所へ収納した。遺物は、掲載遺物と不掲載遺物に分けて収納しており、それぞれコンテナに必要事項を記載したラベルを貼付し保管している。

3　記　載　方　法

掲載遺構

両遺跡とも遺構名は、調査で使用した遺構略号から新たに本書記載用の遺構名へと変更した。その変更については下記の一覧表にて示した。

掲載遺物

本書に掲載した遺物は、木戸井内Ⅵ遺跡・磯鶏石崎遺跡の順に種別を問わず通し番号により掲載番号を付与した。これは遺物実測図・掲載遺物一覧表・写真図版に付記してある番号が共通している。

図版・写真図版

掲載した実測図のスケールは図版にスケールバーを付けた。遺構の縮尺は、竪穴住居跡等を1/40、土坑・炭窯等を1/20で掲載し、遺物は土器、1/3、剥片石器・石製品は1/2で掲載した。なお、写真図版の掲載遺物については縮小を基本としそれぞれ任意の大きさとした。

（福島）

表2　遺構名対照表

木戸井内Ⅵ遺跡

調査時	報告時
SI01	竪穴住居跡1
SI02	竪穴住居跡2
SI03	竪穴住居跡3
SK01	貯蔵穴1
SK03	陥し穴1
SK04	陥し穴2
SK05	陥し穴3
SK08	陥し穴4

調査時	報告時
SK09	陥し穴5
SK10	陥し穴6
SK11	陥し穴7
SK12	陥し穴8
SK02	陥し穴9
SK06	土坑1
SK07	土坑2
SK13	土坑3

調査時	報告時
SW01	炭窯1
SW02	炭窯2
SW03	炭窯3
SW04	炭窯4
SW05	炭窯5
SW06	炭窯6

磯鶏石崎遺跡

調査時	報告時
SW01	土坑1
SW02	土坑2
SI01	検出遺構1
SI02	検出遺構2
SI03	検出遺構3
SI04	検出遺構4

Ⅳ 調 査 成 果

1 木戸井内Ⅵ遺跡

(1)概 要 と 層 序

木戸井内Ⅵ遺跡の調査区は、丘陵尾根頂部に設定されており、尾根頂部より下がった斜面部分および谷部分は調査の対象外である。調査対象となった尾根は、北方向へ延びる尾根筋と西方向へ延びる尾根筋からなり、「Y」あるいは「Y」字形を呈する。本来両尾根筋は連続するものであったが、調査前の伐採作業の進入口確保のため遺構の認められない部分が切り土によって分断されたようである。本来は同一で連続する尾根であるが、便宜的にこの分断地点から北へ延びる尾根を尾根１、西へ延びる尾根を尾根２とそれぞれ称して調査を進めた。

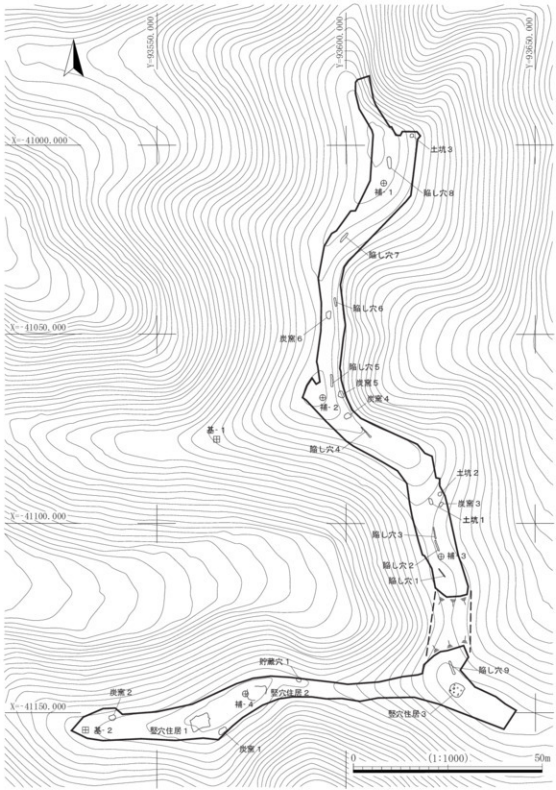
尾根１では尾根頂部の大半で試掘トレンチが掘削されており、その埋め戻し土および表土を除去し、遺構を検出した。遺構は隔し穴とみられる細長いプランや土坑などが認められ、その平面プランの確認は比較的容易であった。また、表土の掘削および検出作業において遺物の出土がみられないことから竪穴住居跡等の居住域には該当しないと想定された。

一方、尾根２では二又の付け根に当たる地点まで陥し穴が分布することが判明したものの、西に延びる尾根筋ではみられない。また、尾根１とは異なり、表土除去後の検出作業で土器片が出土した。検出作業を進めると尾根頂部東側および西側でぼんやりとした遺構のプランがみられ、その規模から竪穴住居跡が複数存在することが想定された。また、これらとは異なり、炭化物が集中して認められる小規模な遺構が確認でき、これらは周辺遺跡でもしばしば認められる炭窯であると推測して調査を進めた。

遺跡の基本層序は、周辺に所在する遺跡と同様であり、特に今回の調査は尾根頂部に限定されているため堆積状況は単純なものである。調査区全体が山林であるが、広葉樹中心の雑木林エリアと針葉樹中心の植林エリアが混在しており、森林腐植土はその発達に若干の差が認められるが、調査においてはこれらが表土として認識される。この尾根頂部ではこの表土直下が地山である。一方、尾根から両側に下る斜面には黒色土の堆積が局所的にみられ、このような地点はさらに下方の谷地形の発端となっているようである。この黒色土は漸移的に色調変化が認められ、色調濃度を減じている。いわゆる漸移層として捉えることができる。さらにその直下では、ロームである黄褐色シルトが認められる。尾根頂部では主に表土直下において花崗岩風化層が確認される。木戸井内Ⅵ遺跡では花崗岩の風化の進みは周辺遺跡ほどではなく、表面で岩脈が確認できる地形面も存在する。今回の調査では、これら基本層序を以下の通り設定して進めた。

Ⅰ層：表土層(暗～黒褐色シルト)、粘性・締まりがまったく認められず、植物の根が繁茂する。
Ⅱ層：黒色土層(黒色シルト)、不純物をまったく含んでおらず、水分を含むとやや可塑性が増す。
Ⅲ層：漸移層(褐色シルト)、Ⅱ層と同一土壌であるが、より淡い色調でⅢ層とⅣ層を繋ぐ。
Ⅳ層：基盤ローム層(黄褐色シルト)、締まりはあるが粘性はない。
Ⅴ層：花崗岩風化層(浅黄橙色シルト～シルト質砂)、固く締まり、一部風化の進んでいない岩質である。

(福島)



点　名	X座標	Y座標	標　高
基-1（3級）	-41077.801	93565.843	65.751
基-2（3級）	-41154.637	93531.133	61.286
補-1（付杭）	-41010.096	93610.028	77.096
補-2（付杭）	-41066.799	93593.872	74.989
補-3（付杭）	-41108.805	93625.186	68.194
補-4（付杭）	-41145.062	93573.403	64.181

第６図　木戸井内Ⅵ遺跡全体図

（2）検　出　遺　構

前述した通り、木戸井内Ⅵ遺跡では尾根頂部のみの発掘調査によって各種遺構を検出した。以下、これら遺構について種別毎に記述を進めることとする。なお、記載順序は遺構種別毎であり、時期・時代はその順序に反映されていない。

竪穴住居跡１（第７図、写真図版３～６）

尾根２の西側に延びる尾根筋上、尾根突端と尾根付け根部分の中間地点に位置する。狭小な尾根頂部から両側に下る斜面始まりにかけて立地しており、尾根筋を最大限に利用したものとみられる。

検出面は基本的にⅣ層上面であるが、部分的にⅤ層が露出する部分も存在する。褐色～黄褐色の検出面に対し、黒褐色または暗褐色のプランが平面的に広がる検出状況である。

他の遺構との重複は認められないが、周囲には竪穴住居跡２および炭窯１が位置する。

平面形態は方形を指向すると考えられるが、南北方向が東西方向に比べると長くなっているため長方形と考えるべきである。ただし、やや形状に歪みがあり、平行四辺形とみることもできる。

軸方向は東西方向に細く延びる尾根筋に沿うように設定されており、長軸はおおむね東西方向である。

規模は東西方向になる長軸5.12m、南北方向になる短軸3.48mである。深さは遺構中央部分の最深部が46cmであるが、斜面に接する北側縁、南側縁においては崩落、流出のためか浅くなっている。

埋土は大別すると３層からなり、上層は濃い色調のシルト、下位の２層は地山に酷似するシルトである。いずれも自然堆積層であると判断されるが、上層と下層との層理面には土器片および炭化物等の混雑物が局所的に密集して出土した。

側壁は尾根筋と直交する東側と西側が明瞭な立ち上がりが認められるが、尾根が下りを見せる北側と南側については、その立ち上がりが不明瞭であった。特に南西側は木の根が複雑に生育しており、これら立ち上がりをより不明瞭にしている。

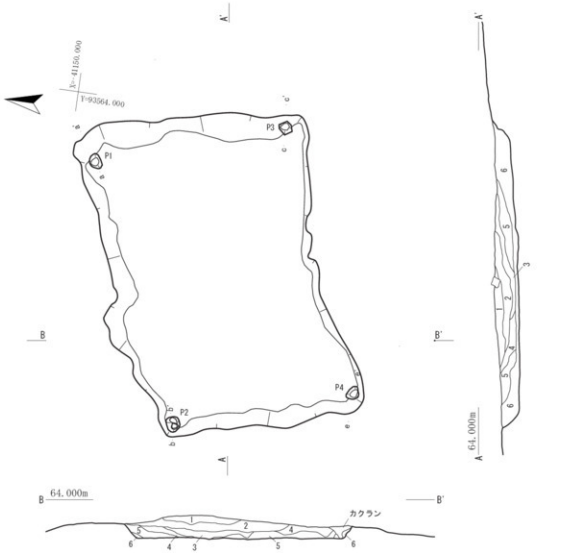
床面は花崗岩の風化した基盤層であるⅤ層を床面としており、本来堅固な地山であるため床面も非常に固く締まっている。床面は混雑物がまったく認められない地山面であったため、もう少し上面に使用面が存在したのかもしれないが、層界を認識できなかったことと、柱穴が上面で認識できなかったことから、この地山面を床面とした。

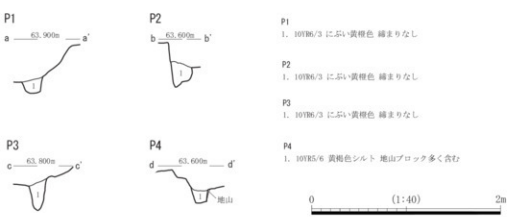
付属施設として床面の４つの隅で柱穴を４個確認した。これらは固く締まった床面とは異なり、締まりの無い埋土である。埋土はいずれも地山であるⅤ層起源であるが、南西隅の柱穴のみやや色調が濃く、他の埋土よりもやや締まっている。床面では焼土がみられない。

遺物は埋土よりまとまって土器片が多く出土した。出土状況からみて竪穴住居跡の機能停止後の埋没過程で廃棄されたものと考えられる。土器は外面に沈線文や交互刺突文を有しており、東北地方南部を中心に分布する天王山式と呼ばれる土器型式、あるいは北上山地を中心に岩手県域に分布する赤穴式と呼ばれる土器型式の一部に似る特徴である。今回出土した弥生土器の大半がこの竪穴住居跡より出土したものである。土器以外の遺物では、土器の集中域付近の同一層位で土製紡錘車が１点出土した。さらに、床面を被覆する埋土最下層から頁岩を素材とする剥片が２点出土した。

出土した土器および紡錘車などの遺物から弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡であると考えられる。

（福島）


X=-41150.000
Y=93364.000
P1
P2
P3
P4
A
A'
B
B'
64.000m
カクラン
竪穴住居跡1
1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 炭化物微量に含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 炭化物、地土少量含む
3. 7.5YR3/4 暗褐色シルト 炭化物、地土ブロック少量含む
4. 10YR3/4 暗褐色シルト 炭化物多く含む
5. 10YR4/4 褐色シルト 炭化物少量含む
6. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 地山V層起源
0　(1:60)　2m


P1
a　63.900m　a'
P2
b　63.690m　b'
P3
c　63.800m　c'
P4
d　63.600m　d'
地山
P1
1. 10YR6/3 にぶい黄橙色 締まりなし
P2
1. 10YR6/3 にぶい黄橙色 締まりなし
P3
1. 10YR6/3 にぶい黄橙色 締まりなし
P4
1. 10YR5/6 黄褐色シルト 地山ブロック多く含む
0　(1:40)　2m

第7図　竪穴住居跡1

竪穴住居跡２（第８図、写真図版７）

尾根２が西側に延びる尾根筋上、一端細く狭まった尾根幅がやや広くなり始める部分に位置する。狭小な尾根頂部から両側に下る斜面始まりにかけて立地しており、尾根筋の幅を最大限に利用したものとみられる。

検出面はⅣ層上面、Ⅴ層が露出している部分についてはその上面である。

形態は平面方形基調であり、尾根筋の方向に沿ってやや長い形態で長方形と想定される。

規模は長軸5.29m、短軸3.48m、深さは55cmを測る。

埋土は大きく上下２層に分かれ、上層は黒色シルト、下層はⅤ層に酷似した締まりの無いマサ土で構成されている。いずれも自然に堆積したものであると考えられる。

側壁は尾根筋と直交する東側と西側が明瞭な立ち上がりが認められるが、尾根が下りを見せる北側と南側については、その立ち上がりが不明瞭であった。また、調査前まで生えていた木が重なる部分があり、その根株によってこれら立ち上がりをより不明瞭にしている。

床面は固く締まった平坦な面である。床面では柱穴その他の付属施設が認められなかった。当初柱穴かと思われた掘り込みも土層断面では埋土の上から切り込んでおり、直接この住居に伴うものではなかった。

出土した遺物の大半は埋土上層で確認され、竪穴住居跡１と同じような特徴を持つ土器であるため天王山式あるいは赤穴式といった土器型式に当てはまるとみられる。

出土したわずかな土器片から弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡であると考えられる。

（福島）

竪穴住居跡３（第９・10図、写真図版８・９）

尾根１と尾根２に分岐する比較的広くなった尾根上に位置する。遺構の立地する地形面は南北方向に尾根の傾斜が認められ、遺構本体が尾根稜線上に重なる。

竪穴住居跡北側の地形がわずかに下る位置に陥し穴９が近在するが、直接的な重複関係は認められない。また、両者の機能および性格を考えた場合、近距離にある両者が併存していたとは思えない。したがって、両者には時期的な先後関係があったものと推測される。

検出面は表土を除去した直下面のⅣ層上面である。Ⅳ層の黄褐色に黒色の略円形プランが確認された。調査を進めると検出時に認識しや黒色土の広がりは埋土最上層の分布範囲であった。

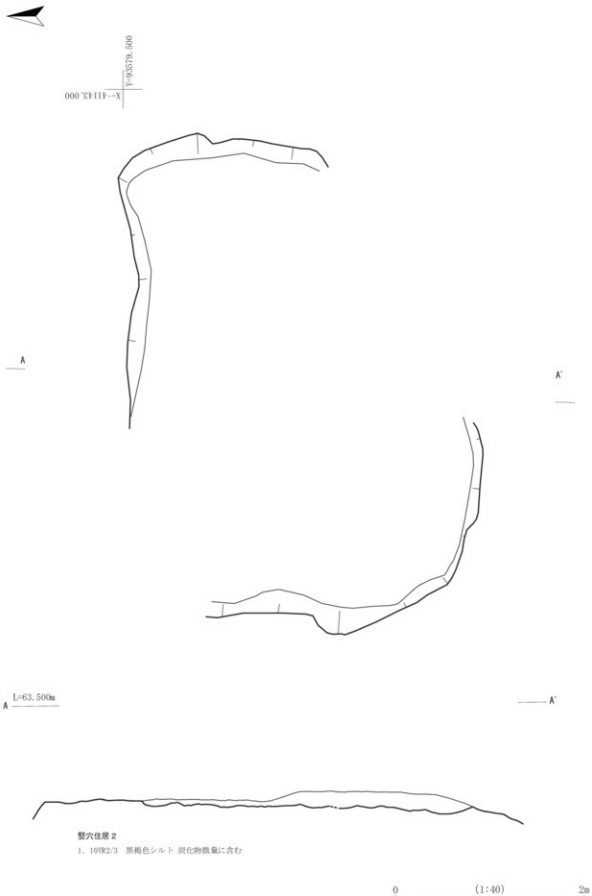
平面形態は方形基調であるが、明瞭なコーナーがみられない隅丸の形状である。地形が北側、南側へと下り勾配であるため南辺と北辺が外方へ広がっており、そのため両側がやや膨らんだ方形となっている。

規模は主軸方向の長さ3.53m、直交方向の長さ3.22mを測り、主軸と直交する方向がやや短い。深さは最も残存している竪穴住居跡中央部で32cmである。

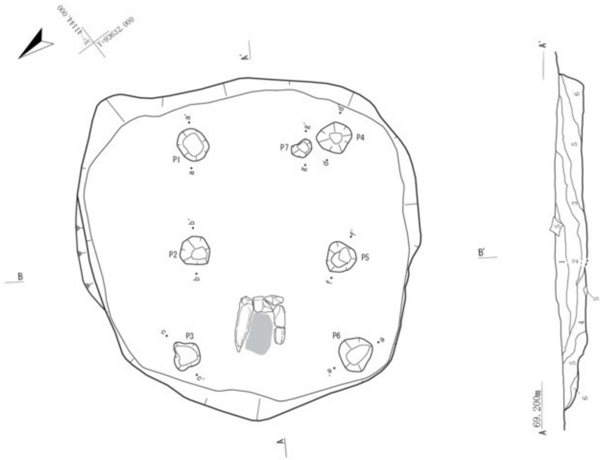
埋土は６層に細分される。最上層が黒色シルトとなり、黒褐色、暗褐色、褐色というように徐々に淡い色調の土層へ変わる。埋土の締まりについても下層ほど固く締まる傾向である。埋土中位には多くの炭化物や焼土粒が混入しており、大半の遺物もこの層位で出土する。

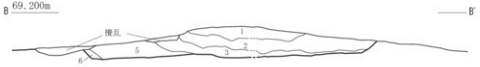
側壁は南東側で急角度に立ち上がるが、一方で、炉の位置する北西側は緩やかな立ち上がりとなっている。

床面はⅣ層中に平坦面を構築しており、側壁等と比べてもより固く締まっている。床面では石囲炉周辺以外炭化物等はみられない。


X=-41143.000
Y=93579.600
A
A'
L=63.500m
A
A'
竪穴住居２
1．10YR2/3　黒褐色シルト　炭化物微量に含む
0
(1:40)
2m

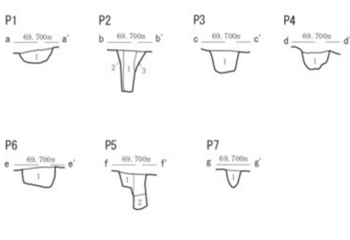
第８図　竪穴住居跡２





竪穴住居跡３

1. 10YR2/1 黒色シルト　　やや粘質 炭化物微量に含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 炭化物、焼土粒少量含む
3. 10YR3/4 暗褐色シルト 炭化物多く含む
4. 7.5YR3/4 暗褐色シルト 炭化物、焼土ブロック少量含む
5. 10YR4/4 褐色シルト　　　炭化物少量含む
6. 10YR4/6 褐色シルト　　　やや粘質　［地山起源の崩落土］



P1

1. 10YR4/6 褐色シルト 粘性 締まり 炭化物含む

P2

1. 10YR5/8 黄褐色粘質シルト(炭化物多量に含む)
2. 10YR6/8 明黄褐色シルト (地山ブロック少量含む)
3. 10YR6/8 明黄褐色

P3

1. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性ややあり

P4

1. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性ややあり

P5

1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性なし
2. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり (炭化物少量含む)

P6

1. 10YR3/4 暗褐色シルト

P7

1. 10YR4/6 褐色シルト (炭化物多量に含む)

0　(1:40)　2m

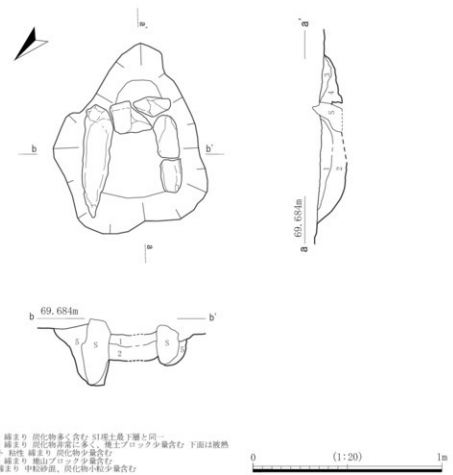
第９図　竪穴住居跡３

床面では柱穴を７個（Ｐ１～７）と石囲炉を検出した。これら柱穴の内Ｐ７以外は主軸方向に石囲炉を挟むように２列並んで存在する。いずれも床面でみられるⅣ層に酷似しているが、床面より赤味や褐色味が強い色調であり、固く締まった床面よりもわずかに締まりがないため柱穴と認識できた。Ｐ２とＰ５は他の柱穴よりも深く、断面では柱痕跡も確認できる。この２個の柱穴は住居の主軸方向と直交する方向に並んで存在しているため一対の関係であったと想像でき、深く掘り込まれた掘り方から上屋の重量を支持する役割を果たしていた可能性が高い。石囲炉は西側で石が認められない「コ」の字形に配列されている。内底面と一部石材にわずかに被熱痕跡が認められる。石は掘り方を伴って据えられており、石の欠落している一辺も掘り込みが及んでいる。このことからこの欠落部分にも本来は石が据えられ、おそらく平面方形に囲まれていたものと推定される。なお、この石の欠落した部分は、Ｐ６直近側壁際で出土した１個の長方形を呈する石がそれに該当する可能性が考えられる。石材の大きさ形態もこの位置に合致するものと思われる。

出土遺物は埋土よりわずかに土器小片が出土した。これら土器片が遺構に伴うものである確証はないが、少なくとも埋没過程において混入したものであると想像される。なお、土器は大木９～10式の特徴を具備している。

出土した遺物から考えて縄文時代中期後葉～中期末の竪穴住居跡であると考えられる。

（福島）



第10図　竪穴住居跡３石囲炉

貯蔵穴１（第11図、写真図版10）

尾根１東側の尾根頂部よりわずかに北側斜面に掛かる地点に位置する。尾根１北側斜面に寄せた排土を重機によって処理をおこなった際、排土とともに地山を削り過ぎたため、この遺構断面が露わになった。平面的にはⅤ層上面で検出した。

平面形態は北半を損壊したため不明要素を含むが、おおむね円形であるものと考えられる。規模は東西1.2m、残存する南北0.92m、深さ74㎝である。

埋土は黒色～黒褐色シルトを主体とし、全体的に締まりが無く自然堆積であると考えられる。底面はほぼ平坦であり、底面から部分的に垂直に立ち上がる壁を有する。

出土遺物が皆無で詳細な時期は特定できないが、規模および形態的特徴から縄文時代の貯蔵穴であると考えられる。

（福島）

陥し穴１（第12図、写真図版10）

尾根２南端部に位置し、岩手県教育委員会の掘削した試掘トレンチ内で確認した。トレンチはⅤ層まで掘り下げられており、その上面で再度遺構を検出した。したがって、遺構上部はすでに失われている。周辺域には陥し穴２・３などがみられる。

平面形態は細長い溝状であり、主軸は尾根筋の延びる南北方向を指向する。規模は長軸2.85m、短軸0.25m、深さ73㎝である。

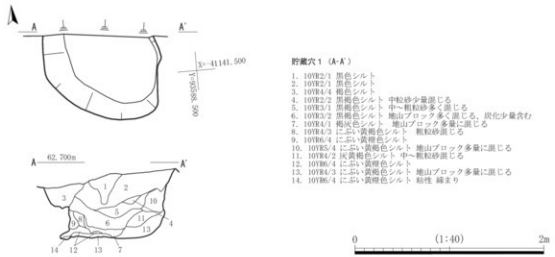
埋土はⅤ層起源のマサ土であるが､基盤となっている地山に比べると締まりが無く色調もやや暗い。最下層には黒褐色シルトの堆積が薄く堆積している様子が認められる。遺構内を充填している埋土の大半はこの遺構の壁が自然崩落して堆積したものであると推測される。底面は長軸方向においてほぼ平坦である。

出土遺物がなく詳細な時期は特定できないが、規模および形態からみて縄文時代の陥し穴であると考えられる。

（鈴木）

陥し穴２（第12図、写真図版10）

尾根２南端部に位置し、岩手県教育委員会の掘削した試掘トレンチ内で確認した。トレンチはⅤ層まで掘り下げられており、その上面で黒褐色の溝状プランを検出した。周辺域には陥し穴１・３などがみられる。



第11図　貯蔵穴１

平面形態は細長い溝状であり、主軸は尾根筋の延びる南北方向を指向する。規模は長軸3.10m、短軸0.3m、深さ90cmである。

埋土はV層起源のマサ土であるが、締まりが無く色調もやや暗い。最上層および最下層には黒褐色シルトの堆積が認められる。埋土の大半はこの遺構の壁が自然崩落して堆積したものであると推測される。

出土遺物がなく詳細な時期は特定できないが、規模および形態からみて縄文時代の陥し穴であると考えられる。

（鈴木）

陥し穴３（第12図、写真図版10）

尾根２南端部に位置し、岩手県教育委員会の掘削した試掘トレンチ内で確認した。トレンチはV層まで掘り下げられており、その上面で黒褐色の溝状プランを検出した。周辺域には陥し穴１・２、土坑１などの遺構がみられる。

平面形態は細長い溝状であるが、長軸両端部がやや膨らみを持つ。主軸は尾根筋の延びる南北方向を指向する。規模は長軸3.80m、短軸0.3m、深さ152cmである。

埋土はIV層起源の黄褐色シルトを基調としているが、締まりは無い。最上層には褐色から暗褐色シルトの堆積が認められ、周辺から自然に流入したものとみられる。埋土の大半はこの遺構の壁が自然崩落して堆積したものであると推測される。

出土遺物は皆無で詳細な時期は特定できないが、規模および形態からみて縄文時代の陥し穴であると考えられる。

（鈴木）

陥し穴４（第12図、写真図版11）

尾根２中央部に位置し、岩手県教育委員会の掘削した試掘トレンチ内で確認した。トレンチはV層まで掘り下げられており、その上面で黒褐色の溝状プランを検出した。検出した地形面は尾根の傾斜変換点であり、北に向け緩やかに標高が高くなる斜面腰部分である。

平面形態は細長い溝状であり、主軸は尾根筋の延びる南北方向を指向する。規模は長軸3.71m、短軸0.49m、深さ51cmである。断面形状は筒形を呈するが、遺構上部まで残存していれば、開口部がやや外へ開く漏斗状を呈するものと推定される。

埋土は４層に細分でき、上位２層はV層起源のマサ土、下位２層はシルトである。いずれも締まりは無い。埋土の大半はこの遺構の壁が自然崩落して堆積したものであると推測される。

出土遺物がなく詳細な時期は特定できないが、規模および形態からみて縄文時代の陥し穴であると考えられる。

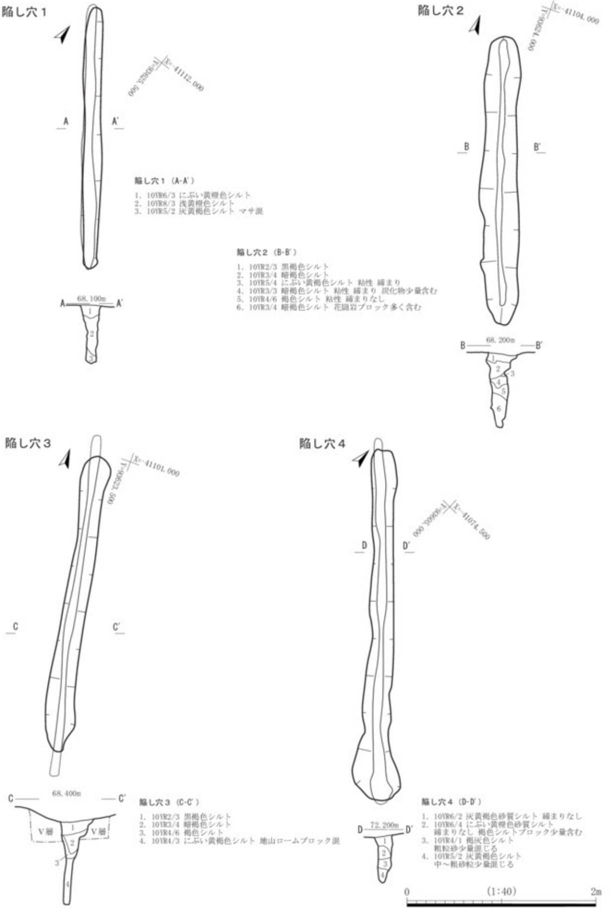
（鈴木）

陥し穴５（第13図、写真図版11）

尾根２中央部に位置し、岩手県教育委員会の掘削した試掘トレンチ内で確認した。トレンチはV層まで掘り下げられており、その上面で黒褐色の溝状プランを検出した。検出した地形面は南から徐々に高くなり、遺構の立地はすでに南からの傾斜が終わる地点である。

平面形態は細長い溝状であり、主軸は尾根筋の延びる南北方向を指向する。規模は長軸3.30m、短軸0.47m、深さ120cmである。断面形状は下部が直立し、上部はやや外傾する。

埋土は10層に細分でき、最上層は黒褐色シルト、下位２層は暗褐色および黒褐色シルトが堆積している。それ以外はV層起源のマサ土であり、この遺構の壁が自然崩落して堆積したものであると推測


陥し穴１
X=-41112.000
Y=35925.000
A
A'
68.100m
陥し穴１（A-A'）
1. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト
2. 10YR8/3 浅黄橙色シルト
3. 10YR5/2 灰黄褐色シルト マサ混
陥し穴２
X=-41104.000
Y=35924.000
B
B'
68.200m
陥し穴２（B-B'）
1. 10YR2/3 黒褐色シルト
2. 10YR3/4 暗褐色シルト
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性 締まり
4. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性 締まり 炭化物少量含む
5. 10YR4/6 褐色シルト 粘性 締まりなし
6. 10YR3/4 暗褐色シルト 花崗岩ブロック多く含む
陥し穴３
X=-41101.000
Y=35923.500
C
C'
68.400m
V層
陥し穴３（C-C'）
1. 10YR2/3 黒褐色シルト
2. 10YR3/4 暗褐色シルト
3. 10YR4/6 褐色シルト
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 地山ロームブロック混
陥し穴４
X=-41074.500
Y=35909.000
D
D'
72.200m
陥し穴４（D-D'）
1. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 締まりなし
2. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト
締まりなし 褐色シルトブロック少量含む
3. 10YR4/1 褐灰色シルト
粗粒砂少量混じる
4. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
中～粗砂粒少量混じる
0
(1:40)
2m

第12図　陥し穴１～４

される。底面は長軸上においてはほぼ平坦であるが、両端は皿状に上傾して高くなる。

出土遺物がなく詳細な時期は特定できないが、規模および形態からみて縄文時代の陥し穴であると考えられる。

（鈴木）

陥し穴６（第13図、写真図版11）

尾根２中央部に位置し、岩手県教育委員会の掘削した試掘トレンチ内で確認した。トレンチはV層まで掘り下げられており、その上面でやや黒みがかった黄褐色の溝状プランを検出した。検出した地形面は、北に向け緩やかに標高が高くなる斜面腰部分である。

平面形態は細長い溝状であり、主軸は尾根筋が南北方向から約45°振るため、これに沿うように北東方向を指向する。規模は長軸2.34m、短軸0.44m、深さ80cmである。断面形状は、下半は直立気味に立ち上がるが、上半は外傾して外方へ開く形状である。

埋土は４層に細分でき、にぶい黄褐色シルトを基調とし、いずれも締まりは無い。埋土の大半はこの遺構の壁（V層）が自然崩落して堆積したものであると推測される。

出土遺物がなく詳細な時期は特定できないが、規模および形態からみて縄文時代の陥し穴であると考えられる。

（鈴木）

陥し穴７（第13図、写真図版11）

尾根２北側に位置し、岩手県教育委員会の掘削した試掘トレンチ内で確認した。トレンチはV層まで掘り下げられており、その上面で黒褐色の溝状プランを検出した。検出した地形面は尾根の傾斜変換点であり、北に向け緩やかに標高が高くなる斜面腰部分である。

平面形態は細長い溝状であり、主軸は尾根筋の延びる南北方向を指向する。規模は長軸3.71m、短軸0.49m、深さ51cmである。断面形状は筒形を呈するが、遺構上部まで残存していれば、開口部がやや外へ開く漏斗状を呈するものと推定される。

埋土は４層に細分でき、上位２層はV層起源のマサ土、下位２層はシルトである。埋土大半はこの遺構の壁が自然崩落して堆積したものと推測される。底面は長軸上ではほぼ平坦であるが、北半部では緩やかに上傾して高くなる。

出土遺物がなく詳細な時期は特定できないが、規模および形態からみて縄文時代の陥し穴であると考えられる。

（鈴木）

陥し穴８（第14図、写真図版12）

尾根２北側に位置し、岩手県教育委員会の掘削した試掘トレンチ内で確認した。トレンチはV層まで掘り下げられており、その上面で黒褐色の溝状プランを検出した。検出した地形面はこの尾根筋で標高が最も高くなる地点である。

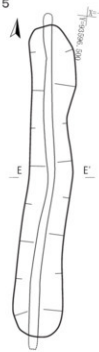
平面形態は細長い溝状であり、主軸は尾根筋の延びる南北方向を指向する。規模は長軸3.19m、短軸1.07m、深さ146cmである。断面形状は下半で直立に近く、上半ではやや外傾して立ち上がる。

埋土は上層中央については遺構周囲からの流入による暗褐色～褐色シルト、上層壁面寄りと下層は壁面崩落の黄褐色シルトを基調とする。底面はほぼ平坦であるが、南端部でわずかに高くなる。

出土遺物がなく詳細な時期は特定できないが、規模および形態からみて縄文時代の陥し穴であると考えられる。

（鈴木）

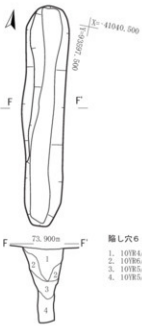
陥し穴５



陥し穴５（E-E'）

1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし 締まりなし
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性なし 締まりなし
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性なし 締まりなし
4. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト 粘性なし 締まりなし
5. 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト 粘性なし 締まりなし
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性なし 締まりなし
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性なし 締まりなし
8. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性なし 締まりなし
9. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なし 締まりなし
10. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし 締まりなし

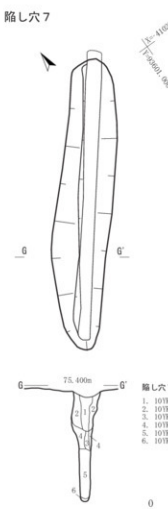
陥し穴６



陥し穴６（F-F'）

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性なし 締まりなし
2. 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト 粘性なし 締まりなし
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性なし 締まりなし
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性なし 締まりなし

陥し穴７



陥し穴７（G-G'）

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なし 締まりなし
2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性なし 締まりなし
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性なし 締まりなし
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性なし 締まりなし
5. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト 粘性なし 締まりなし
6. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性なし 締まりなし

第13図　陥し穴５～７

陥し穴９（第14図、写真図版12）

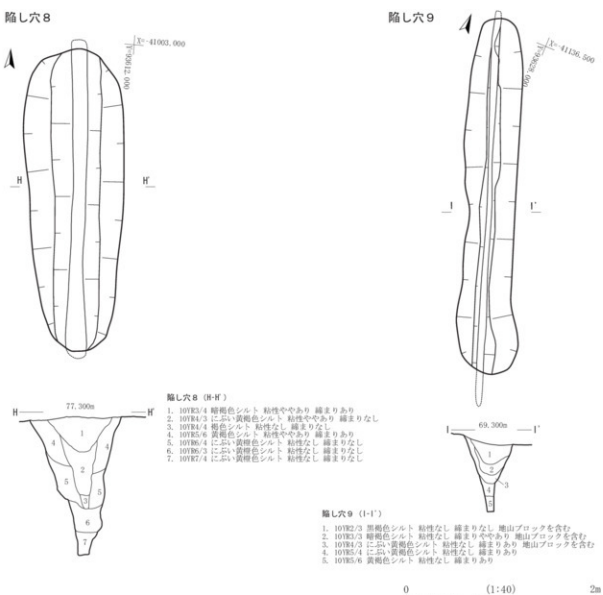
尾根１と尾根２の分岐する地点よりやや尾根１側に位置し、岩手県教育委員会の掘削した試掘トレンチ内で確認した。トレンチはⅤ層まで掘り下げられており、その上面で黒褐色の溝状プランを検出した。やや南側には竪穴住居跡３が所在する。

平面形態は細長い溝状であり、主軸は尾根筋の延びる南北方向を指向する。規模は長軸3.76m、短軸0.58m、深さ81cmである。断面形状は下半でほぼ直立し、上半でやや外傾する。

埋土は上層中央部で遺構周囲からの流入による暗褐色～褐色シルト、上層壁面寄りと下層は壁面崩落の黄褐色シルトを基調とし、５層に分層される。長軸上ではほぼ平坦であるが、南半部ではわずかに高くなる。

出土遺物がなく詳細な時期は特定できないが、規模および形態からみて縄文時代の陥し穴であると考えられる。

（鈴木）



第14図　陥し穴８・９

炭窯１（第15図、写真図版12）

尾根２の尾根突端と尾根付け根部分の中間地点に位置する。立地は尾根頂部から南側斜面にかかる肩部である。表土直下の斜面で炭化物を多く含む黒色のプランとして検出された。

平面形態は楕円形を呈し、長軸2.43m、短軸1.26m、深さ36cmである。

埋土は上下２層に分かれ、黒色および褐色シルトである。上層には多量の炭化物を含む。底面は谷側斜面に向かって緩やかに傾斜し、残存部分では皿状を呈する。

炭化物以外出土遺物はなく、時期不明の炭窯であるが、古代以降の所産であると推測される。

（福島）

炭窯２（第15図、写真図版12）

西側に向けて延びる尾根２の西側に位置する。立地は尾根頂部から北側斜面にかかる肩部であり、遺構南半は尾根の下がり際に、北半は斜面部にそれぞれ掛かる。表土直下面で炭化物を多く含む黒色のプランを検出した。

平面形態はほぼ円形を呈し、長軸1.81m、短軸1.30m、深さ44cmである。

埋土は壁際を除き黒色ないし黒褐色のシルトを基調とし、８層に分層される。４層目と８層目には多量の炭化物が含まれ、木炭の焼成面がそれぞれ２面あると考えられる。底面は南半で平坦、北半は斜面に向かってわずかに傾斜し、微かに被熱痕跡が認められるが不鮮明である。

炭化物以外出土遺物はなく、時期不明の炭窯であるが、古代以降の所産であると推測される。

（福島）

炭窯３（第15図、写真図版13）

尾根１南端近くに位置し、尾根頂部から東側斜面にかかる肩部である。表土直下のⅡ層上面で炭化物を多く含む黒色のプランを検出した。直接的な重複はみられないが、土坑２が近在する。

平面形態は方形を呈し、長軸1.25m、短軸1.02m、深さ22cmである。

埋土は黒色シルトの単層であり、多量の炭化物を含む。底面はほぼ平坦である。

炭化物以外出土遺物はなく、時期不明の炭窯であるが、古代以降の所産であると推測される。

（鈴木）

炭窯４（第15図、写真図版13）

尾根１の南側に位置し、尾根頂部に立地する。表土直下Ⅴ層上面で黒褐色の円形プランを検出した。平面形態は方形を呈し、長軸1.65m、短軸1.57m、深さ39cmである。

埋土は褐色ないし黒色シルトを基調とし、２層に分層され、全体に締まりがない。下層には多量の炭化物が含まれる。底面はほぼ平坦である。

炭化物以外出土遺物はなく、時期不明の炭窯であるが、古代以降の所産であると推測される。

（鈴木）

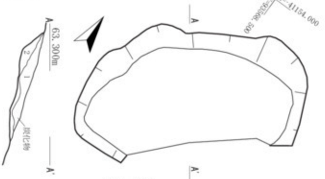
炭窯５（第15図、写真図版13）

尾根１中央の屈曲部に位置し、尾根から斜面にかかる肩部に立地する。表土直下のⅤ層上面で黒色の円形プランを検出した。

平面形態は楕円形を呈し、長軸1.94m、短軸1.48m、深さ60cmである。

埋土は黒褐色ないし黒色シルトを基調とし６層に細分され、全体的に締まりがなく、炭化物が含まれる。下層と２層目には特に多量の炭化物が含まれる。底面は東に向け緩やかに傾斜する。

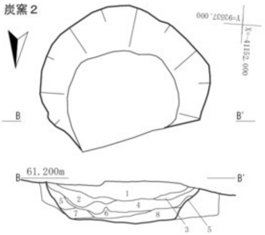
炭窯１



炭窯１（A-A'）

1. 10YR2/1 黒色シルト　炭化物多く含む
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 地山ブロック混

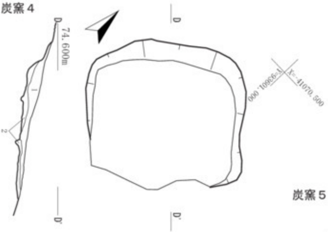
炭窯２



炭窯２（B-B'）

1. 10YR2/1 黒色シルト 炭化物少量含む
2. 10YR3/1 黒褐色シルト 炭化物微量含む、中砂粒混
3. 10YR3/2 黒褐色シルト 締まりなし 中～粗粒砂混
4. 10YR2/1 黒色炭化物 シルト混
5. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 細粒砂混
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 締まりなし
7. 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロック含む
8. 10YR2/1 黒色シルト 炭化物多量に含む

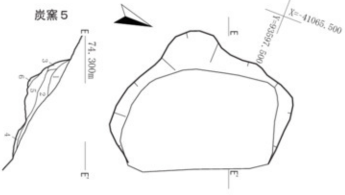
炭窯４



炭窯４（D-D'）

1. 10YR4/4 褐色シルト 木炭粒をわずか含む
2. 10YR2/1 黒色シルト 多量の木炭を含む

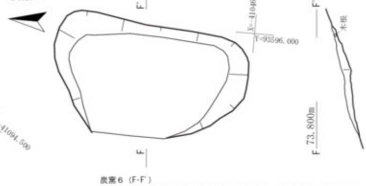
炭窯５



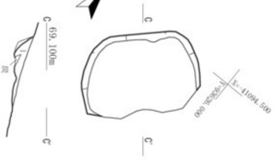
炭窯５（E-E'）

1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし 締まりなし 地山崩落土を含む
2. 10YR2/1 黒色シルト 粘性なし 締まりなし 多量の木炭を含む
3. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性なし 締まりなし　地山崩落土主体
4. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性なし 締まりなし 木炭を多量含む
5. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし 締まりなし
6. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性なし 締まりなし 地山ブロックを含む

炭窯６



炭窯３



炭窯６（F-F'）

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なし 締まりなし 木炭粒をわずかに含む

炭窯３（C-C'）

1. 10YR2/1 黒色シルト 炭化物多量に含む

0　(1:40)　2m

第15図　炭窯１～６

炭化物以外出土遺物はなく、時期不明の炭窯であるが、古代以降の所産であると推測される。

（鈴木）

炭窯６（第15図、写真図版13）

尾根１北側の尾根中央に位置し、尾根から南側斜面にかかる肩部に立地する。表土直下Ⅴ層上面で暗褐色のプランを検出した。

平面形態は楕円形を呈し、長軸2.05m、短軸1.26m、深さ29cmである。

埋土は暗褐色シルトを基調とした単層であり、炭化物をわずか含む。底面は西に向け、わずかに傾斜する。

炭化物以外出土遺物はなく、時期不明の炭窯であるが、古代以降の所産であると推測される。

（鈴木）

土坑１（第16図、写真図版14）

尾根１南側に位置し、尾根頂部に立地する。Ⅳ層上面で黒褐色の楕円形プランを検出した。平面楕円形、長軸1.65m、短軸0.84m、深さ62cmである。

埋土は上層暗褐色シルト、下層灰黄褐色シルトである。全体的に固く締まっており、上層には炭化物を多く含む。底面は平坦で、中央に浅く小規模な副穴が存在する。

出土遺物はなく時期不明であるが、遺構の特徴から縄文時代の陥し穴の可能性もある。

（福島）

土坑２（第16図、写真図版14）

尾根１南側に位置し、尾根頂部から東斜面にかかる肩部に立地する。Ⅱ層上面で検出した。平面円形、長軸1.09m、短軸0.96m、深さ44cmである。

埋土は２層のシルト、底面は平坦である。

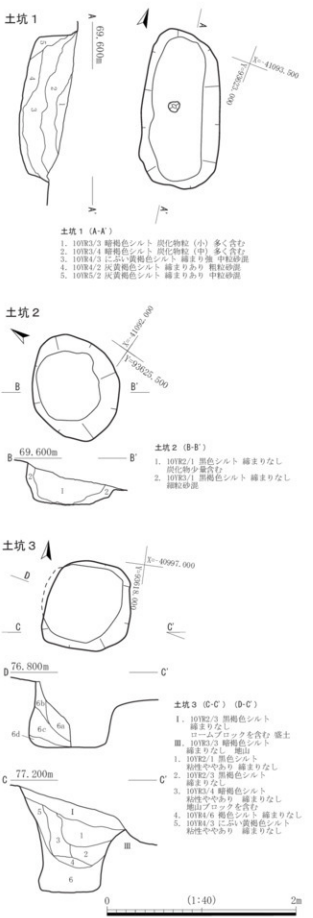
出土遺物はなく時期不明の土坑である。

（福島）

土坑３（第16図、写真図版14）

尾根１北端、東側斜面に立地する。表土下の二次堆積層直下のⅢ～Ⅳ層上面で検出した。

直径約１mの平面円～方形、深さ112cmを測る。尾根側の側壁はオーバーハングし、底面は



第16図　土坑１～３

平坦である。

埋土上層は黒色ないし暗褐色のシルト、下層は褐色ないし黄褐色のシルトを基調とし、6層に分けられ、最下層は炭化物を含む。当初は最下層を地山として調査していたが、下層が埋土であることが判明し、最終的にV層の固い底面まで掘削した。

遺構の特徴から縄文時代の貯蔵穴である可能性が考えられる。

（福島）

（3）出　土　遺　物

遺物は竪穴住居跡が位置する尾根2を中心に縄文～弥生時代の土器および石器が出土した。

土器（第17・18図　写真図版17～19）

1～47・51は弥生土器である。その特徴は弥生時代後期の天王山式、湯舟沢式、赤穴式などと呼ばれる土器群と共通する。これらのいずれに該当するかはその型式設定および属性の捉え方によって異なると思われるが、ここでは文様構成および文様細部についてその特徴を概述することとする。多くの土器片には接点がなく接合しなかったが、数個体分にまとまるものとみられる。破片の持つ特徴から確実視できるのは3個体であり、それ以外にもこれら3個体とは異なる特徴を有する破片も散見される。以下、それぞれの土器片を整理した3個体のまとまりを個体A～Cという呼称でまとめて詳述する。

個体Aは最も多くの破片が存在し、その文様構成が良好に看取できる個体である。9・10・17・19・21・22・23～26・29の器表面にみられるように口縁～頸部に文様帯があり、その直下である体部上半にも文様帯が巡る。口縁部の形態は、高低差僅少ながら波状あるいは山形を呈し、わずかに肥厚しながら外傾する。口縁端部は滑らかなヨコナデが施されており、原体の圧痕は認められない。口縁部文様帯は、深く刻み込まれた平行する2条の沈線が口縁部の形態に沿うように巡る。この2条の沈線内区上下に交互刺突文が施されている。この2条の平行沈線内区を交互刺突文で充足する手法で文様帯上下端が設定され、その設定内部には細く刻みの浅い沈線によって幾何学的な文様が施されている。この幾何学的な文様は、基本的に文様帯内部を2条の併走する沈線が横方向に展開しており、口縁部の山形頂部の単位毎、形状沿うように重菱形文となる。これら重菱形文を連続する2条の平行沈線で繋いでいる。体部上半の文様帯は細く刻みの浅い沈線によって幾何学的な文様が横方向に展開する。幾何学的な文様は9・24・26のように横向きの重楕円形が連続するものと考えられる。ただし、29が同一個体であるならば、重菱形文を挟むような構成となっている可能性も想定できる。口縁部文様帯を画する上下沈線とセットの交互刺突文は上下交互に刺突されており、細く深く刻まれている。痕跡を観察すると工具先端は爪楊枝先端部ほどではないが、先端が尖ったものであると考えられる。口縁部文様帯は天王山式の特徴、体部上半の文様帯は赤穴式や湯舟沢式の特徴がそれぞれみられる。個体Aは体部が外傾し、口縁部が開く器種、すなわち甕であると推定できる。

個体Bは口縁部片の30、頸部片の28・31、体部の14などが挙げられる。他の破片と異なり、やや厚手であり、頸部に明瞭な屈曲があり、口縁が波状を呈する形態であると考えられる。口縁部の波状頂部は縦方向の肥厚部が貼付によってなされており、これには原体圧痕文が押捺された後に、沈線が刻まれている。文様構成は口縁部文様帯には2条の平行沈線と交互刺突文で天地を区画され、内部は地文のみである。さらに、頸部にも同様の文様帯が存在するものとみられる。また、口唇部には縄文原体の圧痕文が微かに確認できる。頸部に屈曲を持つ器形であると想定され、壺の可能性が考えられる。個体Bと同様の特徴を有する47は文様の微細が異なっており同一個体ではないと考えられる。

個体Ｃもやはり交互刺突文を有する土器片であり、34・35・37・38・41などがこれに該当する。これらは先述した個体Ａと個体Ｂの交互刺突文とは異なる特徴が認められる。個体Ｃは土器に残された刺突痕跡細部の観察から、かなり細い竹管状の工具が用いられていること、その施文方法が工具を器面に垂直に押しつけられる手法であることが看取される。一方、その他の個体の交互刺突文は工具先端が細くなったもの、刺突の方向は器面に対して工具を斜め方向に押しつける点で痕跡が大きく異なっている。すなわち、個体Ａ・Ｂの交互刺突文は、上部と下部で押しつけ方に変化を持たせ、その名称の通り、上下を交互に施文する意識が認められるが、個体Ｃの刺突列は配置的に交互になるが、施文の手法としては本来の交互からやや遠のいているような印象である。この文様に時間的な変化が現れているとすれば、個体Ｃは個体Ａ・Ｂに後続する可能性を現段階では考えておきたい。

その他の弥生土器片について特筆すべきは33の１点のみがその他の個体片と異なる点である。これは微細であるが、口縁部片である。器壁は出土した弥生土器の中でもっとも薄く、色調も赤味が強い。口縁端部には微かに撚糸原体の圧痕が認められ、外面は多条の沈線が一定の間隔を置いて重なるように施されている。沈線は非常に細く浅い。文様の意匠は不明であるが、山形が連続する可能性が考えられる。器種は不明であるが、比較的小ぶりな土器であると推測される。

48～50・52～58は縄文土器である。53がミニチュアである以外はすべて深鉢であると考えられる。57は幅広の沈線が縦方向に施され、これを境にして左右が磨り消し部分と地文部分に分けられており、その特徴から縄文時代中期後葉に相当する土器であると推定される。その他の縄文土器についても、50が刺突列と幅広の沈線が認められ、やはり中期後葉～末頃の土器片である可能性が高い。

土製品（第18図　写真図版19）

61は土製の紡錘車である。ほぼ正円形の円盤であり、円中心部には焼成前の穿孔がなされている。円盤の厚みは中心部がもっとも厚く、縁辺に向け徐々にその厚みが減じる。

石器（第18図　写真図版19）

出土した石器類のうち石鏃１点、磨製石斧１点、その他剥片石器２点を掲載した。63は頁岩製の有茎石鏃である。細長い三角形の鏃身に折れているが、頭部が作り出されている。62・64はいずれも自然面を残すが、頁岩製の削掻器であると考えられる。65は二つに折れているが、磨製石斧である。刃部には刃こぼれがみられ、使用されたことが明らかである。

（福島）

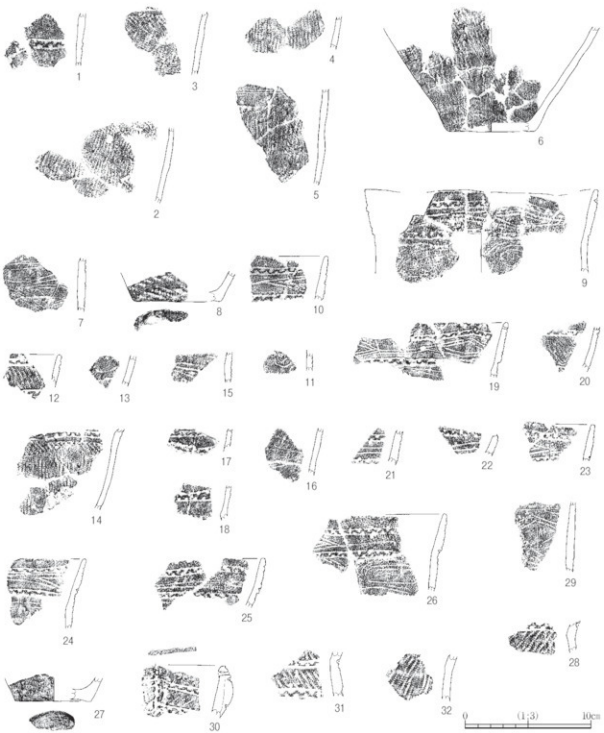
（４）小　　結

木戸井内Ⅵ遺跡の調査では、標高65～70mの丘陵尾根頂部で縄文時代中期後葉の竪穴住居跡１棟（竪穴住居跡３）、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡２棟（竪穴住居跡１・２）をそれぞれ調査した。

縄文時代の竪穴住居跡３は６個の柱穴と石囲炉を有しており、単独で存在する。少量ながら大木９式～10式頃に相当する土器が出土した。

弥生時代の竪穴住居跡２棟はいずれも西に向けて延びる尾根２頂部に位置する。竪穴住居跡１は平面方形、四隅に柱穴を持つ。竪穴住居跡２も平面方形を基調とする同時代の竪穴住居跡であると考えられる。いずれも狭小な尾根頂部がわずかにその幅を広げる地点に位置している点で両者は共通する。住居埋土から交互刺突文を有する天王山式～赤穴式（いわゆる湯舟沢式相当も含む）に比定される土器や土製の紡錘車が出土した。弥生土器は口縁部に文様帯を持ち、体部には撚糸文が施される。

その他の遺構では、縄文時代の陥し穴９基、貯蔵穴１基、古代以降の炭窯６基、土坑３基を調査した。いずれも出土遺物が無く、詳細な時期を特定できない。陥し穴は溝状の形態のものが主体である。



第17図　出土遺物（1～32）

いずれも尾根頂部に立地し、尾根筋に沿うような軸方向である。尾根頂部を直交して横切る獲物を狙ったと考えられる。貯蔵穴はこの遺跡唯一の縄文時代の竪穴住居跡3と関係性が考えられる。土坑は断定できないが、土坑1は楕円形の陥し穴、土坑2・3は縄文時代の貯蔵穴である可能性が考えられる。

（福島）

第18図　出土遺物(33～65)

表3　掲載遺物一覧（土器）

掲載No.	種別	出土遺構・位置	おもな文様	胎土	焼成	色調	寸法（cm）			備　考
							口径	器高	底径	
1	弥生土器	竪穴住居跡1・土器集中部	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	4.1	－	
2	弥生土器	竪穴住居跡1・土器集中部	地文のみ	精良	良好	橙色	－	6.0	－	
3	弥生土器	竪穴住居跡1・土器集中部	沈線文	精良	良好	黄橙色	－	4.9	－	
4	弥生土器	竪穴住居跡1・土器集中部	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	2.7	－	
5	弥生土器	竪穴住居跡1・土器集中部	沈線文	精良	良好	黄橙色	－	7.6	－	
6	弥生土器	竪穴住居跡1・土器集中部	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	8.15	6.8	
7	弥生土器	竪穴住居跡1・南西区南壁際	沈線文	精良	良好	黄橙色	－	4.2	－	
8	弥生土器	竪穴住居跡1・南西区南壁際	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	2.4	－	
9	弥生土器	竪穴住居跡1・北西区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	18.6	6.6	－	
10	弥生土器	竪穴住居跡1・北西区・南東区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	4.0	－	
11	弥生土器	竪穴住居跡1・北東区	沈線文	精良	良好	黄橙色	－	1.6	－	
12	弥生土器	竪穴住居跡1・北東区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	2.5	－	
13	弥生土器	竪穴住居跡1・南東区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	2.4	－	
14	弥生土器	竪穴住居跡1・南東区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	6.4	－	
15	弥生土器	竪穴住居跡1・南東区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	2.4	－	
16	弥生土器	竪穴住居跡1・南東区	沈線文	精良	良好	黄橙色	－	3.8	－	
17	弥生土器	竪穴住居跡1・南東区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	1.7	－	
18	弥生土器	竪穴住居跡1・南東区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	2.8	－	
19	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴北西区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	4.4	－	
20	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴北西区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	3.5	－	
21	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴北西区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	2.7	－	
22	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴北西区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	1.7	－	
23	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴南西区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	2.8	－	
24	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴北東区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	5.5	－	
25	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴南西区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	4.0	－	
26	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴南西区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	6.2	－	
27	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴南西区	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	1.9	－	
28	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴南西区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	2.6	－	
29	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴南西区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	5.9	－	
30	弥生土器	竪穴住居跡1・竪穴南東区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	4.1	－	口縁端部に原体圧痕
31	弥生土器	竪穴住居跡2	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	3.4	－	
32	弥生土器	竪穴住居跡2	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	3.6	－	
33	弥生土器	竪穴住居跡2・南西区	沈線文	精良	良好	にぶい赤褐色	－	2.4	－	
34	弥生土器	竪穴住居跡2・南西区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	1.9	－	
35	弥生土器	竪穴住居跡2・南西	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	2.3	－	
36	弥生土器	竪穴住居跡2・南西	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	5.6	－	
37	弥生土器	竪穴住居跡2・南西	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	3.2	－	
38	弥生土器	竪穴住居跡2・南西	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	1.8	－	
39	弥生土器	竪穴住居跡2・南東区	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	1.9	－	
40	弥生土器	竪穴住居跡2	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	3.1	－	
41	弥生土器	竪穴住居跡2	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	1.6	－	
42	弥生土器	竪穴住居跡2	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	3.4	－	
43	弥生土器	竪穴住居跡2	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	3.0	－	
44	弥生土器	竪穴住居跡2		精良	良好	黄橙色	－	6.5	－	
45	弥生土器	補4東①）	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	7.0	－	
46	弥生土器	補4東	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	3.4	－	
47	弥生土器	補4近く	沈線文、交互刺突文	精良	良好	黄橙色	－	3.2	－	口縁端部に原体圧痕
48	縄文土器	竪穴住居3・南東区	地文のみ	精良	良好	褐色	24.0	8.3	－	
49	縄文土器	竪穴住居3・北斜面	地文のみ	精良	良好	褐色	－	2.5	－	
50	縄文土器	竪穴住居3・北斜面	沈線文、刺突文	粗	良好	褐色	－	2.7	－	
51	弥生土器	竪穴住居3・北傾斜面	沈線文、交互刺突文	精良	良好	褐色	－	3.4	－	
52	縄文土器	竪穴住居3・南東区	地文のみ	精良	良好	褐色	－	5.4	－	
53	縄文土器	竪穴住居3・北東区	地文のみ	精良	良好	褐色	－	1.4	3.0	
54	縄文土器	竪穴住居3・北東区	地文のみ	精良	良好	褐色	－	3.9	－	
55	縄文土器	竪穴住居3・北西区	沈線文	精良	良好	褐色	－	2.8	－	
56	縄文土器	竪穴住居3・北西区・東壁部	地文のみ	精良	良好	褐色	－	6.1	－	
57	縄文土器	東壁部	沈線文、磨消縄文	精良	良好	褐色	－	3.3	－	
58	縄文土器	東壁	地文のみ	精良	良好	褐色	－	5.2	－	
59	弥生土器	出土地点不明	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	4.1	－	
60	弥生土器	尾根2攪乱	地文のみ	精良	良好	黄橙色	－	3.8	－	

2　磯鶏石崎遺跡

(1)概要と層序

磯鶏石崎遺跡は丘陵の奥まった所に位置するA地区、海側に突き出た丘陵突端部に位置するB地区の2箇所の調査をおこなった。なお、両地区の間も事業範囲内であるが、岩手県教育委員会による事前の試掘調査結果により調査対象から除外されている。

A地区は尾根頂部とこれに付随する北側斜面上部が調査対象として設定されていた。A地区は工事の変更により調査途中で調査を中止するに至った。東側と西側の一部の表土掘削を完了していたため、これら箇所については遺構を検出し、その状況を記録した。調査区内の標高は約40～47mであり、頂部は他の尾根筋よりも比較的幅広である。頂部では比較的大きな遺構を明瞭に検出することができた。尾根頂部は10～20cmの表土層を除去すると遺構検出面であり、斜面部は下方に下がるにつれ表土直下で黒色土の堆積が認められる。黒色土には遺物は含まれていなかった。

B地区は調査区全体が東側に向けて下る傾斜地である。尾根筋は調査区中央東西方向に延び、北側と南側にそれぞれ斜面を有し、北側斜面はより斜度があり、南側斜面はより緩やかな斜面である。遺構は北側斜面に2基の土坑を検出した以外は、後世の攪乱が分布している。特に、尾根筋上には溝状の攪乱が延びている。いずれの攪乱も現代のゴミなどがみられ、斜面下方に位置していた現代の宅地と同じ時代のものであると推測される。

A地区、B地区ともに基本層序は以下に示すとおり周辺の遺跡と同じ様相である。

Ⅰ層：表土層(黒褐色シルト)、粘性・締まりがまったく認められず、植物の根が繁茂する。
Ⅱ層：黒色土層(黒色シルト)、不純物をまったく含んでおらず、水分を含むとやや可塑性が増す。
Ⅲ層：漸移層(暗褐～褐色シルト)、Ⅱ層と同一土壌であるが、より淡い色調でⅢ層とⅣ層を繋ぐ。
Ⅳ層：基盤ローム層(黄褐色シルト)、締まりはあるが粘性は認められない。
Ⅴ層：花崗岩風化層(浅黄橙色シルト～シルト質砂)、固く締まり一部岩質、岩塊となっている。

(福島)

(2)検出遺構

磯鶏石崎遺跡A地区では尾根頂部の平坦面で竪穴住居跡と思われる遺構を検出した。検出したのみで調査を終えているためその時代および竪穴住居跡である確証は得られなかった。ただし、Ⅳ層上面で検出した平面形態を考慮すると各遺構とも古代の竪穴住居跡である可能性が非常に高い。また、遺構周辺では古代の土器が少量ながら出土しており、より蓋然性を高めている。

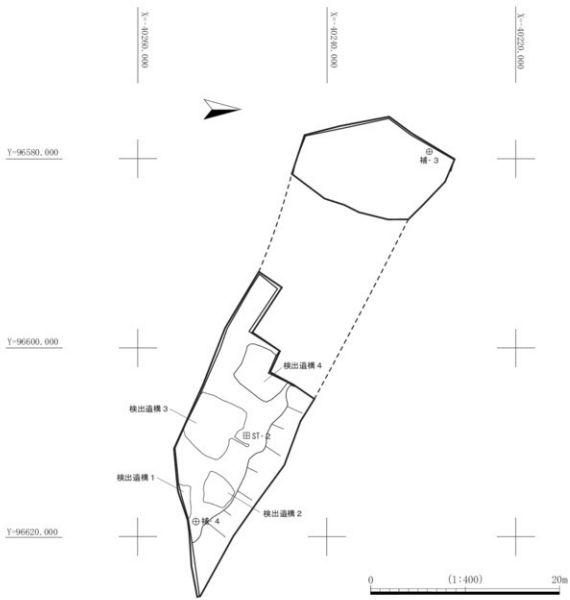
一方、海側尾根上に位置するB地区では炭窯の可能性が考えられる土坑2基を調査した。これらは埋土の掘削をおこない完掘した。

(福島)

検出遺構1～4(第19図、写真図版15)

いずれの遺構もA地区の尾根上平坦部に立地する。平面的には一列に並ぶように分布する。検出遺構1は今回の設定範囲より外へ延びる。いずれも表土直下のⅣおよびⅤ層上面で黒褐色の方形プランを検出した。遺構埋土の掘削をおこなっていないため、明確な出土遺物もなく詳細不明であるが、形態から考えて古代の竪穴住居跡であると考えられる。

(福島)



第19図　磯鶏石崎遺跡Ａ地区全体図

土坑１（第21図、写真図版16）

Ｂ地区稜線上よりやや北側へ下がった斜面部に位置する。表土直下の斜面で炭化物を多く含む黒色のプランとして検出された。部分的に後世の攪乱を受けている。

平面形態は楕円形を呈し、残存する長軸2.23m、短軸1.28m、最深部の深さ56cmである。

埋土は細かく分層でき、黒色および黒褐色シルトを主体にし、褐色シルトが部分的に介在する。上層と最下層には多量の炭化物を含む。底面は平坦であり、比較的急な角度で側壁が立ち上がる。

炭化物以外出土遺物は無く時期不明であるが、炭窯である可能性も考えられる。

（福島）

土坑２（第21図、写真図版16）

Ｂ地区稜線上よりやや北側へ下がった斜面部に位置する。表土直下の斜面で炭化物を多く含む黒色

のプランとして検出された。

平面形態は不整な楕円形を呈し、長軸1.50m、短軸1.32m、最深部の深さ162cmである。

埋土は５層に分かれ、炭化物を含むが、最下面では特に多量の炭化物が認められた。緩やかに立ち上がる側壁に、皿状に凹む底面を有する。

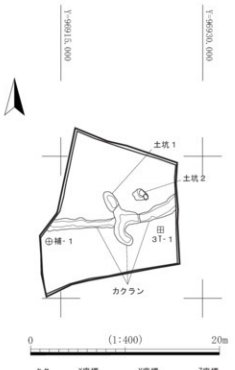
炭化物以外出土遺物は無く時期不明の土坑であるが、古代以降の炭窯である可能性も考えられる。

（福島）

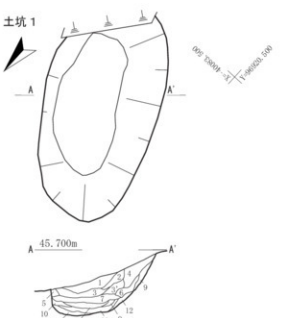
（3）出　土　遺　物

磯鶏石崎遺跡では竪穴住居跡が位置するＡ地区で古代の土器片がいくつか出土した。いずれも遺構が立地する尾根上ではなく、北側の斜面表土～Ⅱ層の間で出土したものである。本来は尾根上にあったものが斜面部へ流出した可能性が高いと思われる。

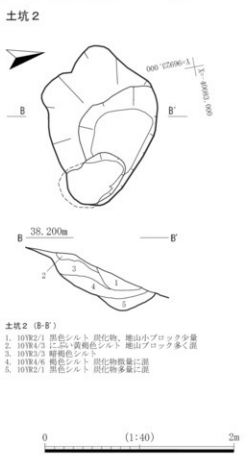
66は土師器甕の口縁部片である。口縁部は短



第20図　磯鶏石崎遺跡Ｂ地区全体図

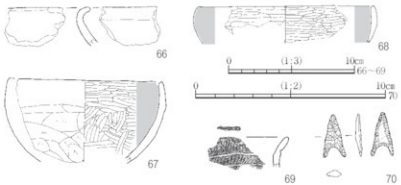


土坑１（A-A'）
1.　10YR3/2　黒褐色シルト　締まりなし
2.　10YR2/1　黒色シルト
3.　10YR2/2　黒褐色シルト　地山ブロック多量　ざはブロックなし
4.　10YR3/4　暗褐色シルト　微粒砂混
5.　10YR4/6　褐色シルト　締まりなし
6.　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
7.　10YR3/1　黒褐色シルト　地山小ブロック多量混
8.　10YR6/4　にぶい黄橙色シルト　中粒砂混
9.　10YR4/6　褐色シルト
10.　10YR4/6　褐色シルト
11.　10YR3/1　黒褐色シルト
12.　7.5YR5/6　明褐色シルト　締まりなし
13.　10YR6/6　明黄褐色シルト



土坑２（B-B'）
1.　10YR2/1　黒色シルト　炭化物、地山小ブロック少量
2.　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　地山ブロック多く混
3.　10YR3/3　暗褐色シルト
4.　10YR4/6　褐色シルト　炭化物微量に混
5.　10YR2/1　黒色シルト　炭化物多量に混

第21図　土坑１・２



第22図　出土遺物(66～70)

く緩やかに外反し、端部は丸く収められている。胎土は砂粒をわずかに含むが、おおむね緻密である。焼成は非常に良好で硬質であり、色調はにぶい褐色である。内外面とも痕跡を残すような調整は認められないが、口縁部は強いヨコナデが施されている。口径は不明であるが、中～小形の甕である可能性が考えられる。帰属時期は器形から類推して、８世紀後半～９世紀前半であると考えられる。

67は土師器坏である。全体に丸みを有する椀形の器形である。口縁部と体部の境界には横方向の粗い沈線が巡り、沈線より下位は全面的にヘラケズリにより器形が整えられている。内面は全面不定方向のヘラミガキ調整がみられるが、口縁部内面のみ規則的な横方向のヘラミガキに変化している。全体的に黄橙色を基調とするが、内面のみ黒色処理されている。焼成は非常に良好であり、器壁内部まで酸化している。口縁部と体部を沈線で上下区分された器形的な特徴から８世紀後半～末頃の所産であると考えられる。

68も土師器坏片である。同一個体と思われる多数の破片が出土したが、図化したのは口縁部のみの破片である。口縁部は内彎気味の丸みを持つ椀形の器形であると推測される。内外面とも横方向のヘラミガキ調整が密に施されており、さらに内外面とも黒色処理されている。口径は復元して図化したが、その他の破片を観察すると図よりもやや小振りな印象を受ける。その他同一個体の破片はいずれも剥離したような破片であり、焼成時の破損品である可能性も考慮する必要がある。器形の特徴から67と同様、８世紀後半～末頃の所産であると考えられる。

一方、Ｂ地区では弥生土器片１点と石鏃１点が出土した。いずれも遺構検出作業中に出土したものであるため本来帰属する遺構は不明である。

69は弥生土器の口縁部片である。微細な破片であるため全体の器形は不明である。口縁部は外傾し、端部は丸く収められている。外面には頸部に当たる部分に１条の沈線、それよりやや下がった位置にもう１条沈線が巡らされており、それ以外は口縁端部まで縄文が認められる。特徴から弥生時代中期～後期のものである可能性が考えられる。

70は頁岩製の石鏃である。無茎であるが脚部が長く調整されている。長い三角形を呈し、長さ2.3㎝、幅1.2㎝を測る。詳細な時期は不明であるが縄文時代に帰属するものであると考えられる。

（福島）

（4）小　　結

今回の磯鶏石崎遺跡の調査で得られた成果を概述すると、Ａ地区では検出作業で留めたため詳細は不明であるが、古代の竪穴住居跡であると思われる遺構４基を確認することができた。これらは周辺の丘陵地帯では珍しく比較的平坦で幅広の尾根が延びており、集落域としての利用価値が高かったものと考えられる。一方、Ｂ地区では土坑２基を調査したが、出土遺物を伴わないため時代は不明である。ただし、弥生土器片が１点出土したことから周辺に同時代の遺構が存在する可能性が考えられる。

（福島）

Ⅴ 総　　括

1　木戸井内Ⅵ遺跡

今回の発掘調査で検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡１棟・貯蔵穴１基・陥し穴９基・土坑２基、弥生時代の竪穴住居跡２棟、時期不明の炭窯６基、土坑１基である。いずれも設定された尾根上の調査範囲内に位置する。

(1)居住と狩猟

遺構がみられた調査区内の尾根上では縄文時代～弥生時代の人々の活動痕跡が調査した遺構によって明らかになった。縄文時代には中期の竪穴住居跡(竪穴住居跡３)や詳細な時期不明であるが陥し穴があり、その後弥生時代後期にも竪穴住居跡(竪穴住居跡１・２)が営まれる。長い断絶と短い土地利用があったようであり、その時代その時代によって土地の利用方法が異なっている。

先に述べたように、この尾根上が最初に居住域として利用されたのは縄文時代中期である。ただし、竪穴住居跡は１棟のみであり、集落と呼ぶにはかなり寂しい状況である。これに関しては調査区外、特に竪穴住居跡３より東側のより高位面に同時期の居住域が広がる可能性も考えられる。しかし、周辺域での出土遺物がほとんどでみられないため、仮に竪穴住居跡等が存在したとしても多数存在するような状況にはないものと推測できる。すなわち、この遺跡の尾根上にみられる縄文時代中期の集落は、限られたスペースで小規模に展開する集落であったと考えられる。これは検出した貯蔵穴が非常に少ないことも推測材料として挙げることができる。確実に貯蔵穴であるとしたのは貯蔵穴１のみであるが、竪穴住居跡３より西に下った先に存在することからこれらのセット関係を視野に入れたい。当時、狭い尾根上での生活がどのようなものであったか想像することは難しいが、周辺の遺跡でも同じような立地環境にある集落がいくつも存在することからこの地域特有のスタイルがあるのかもしれない。

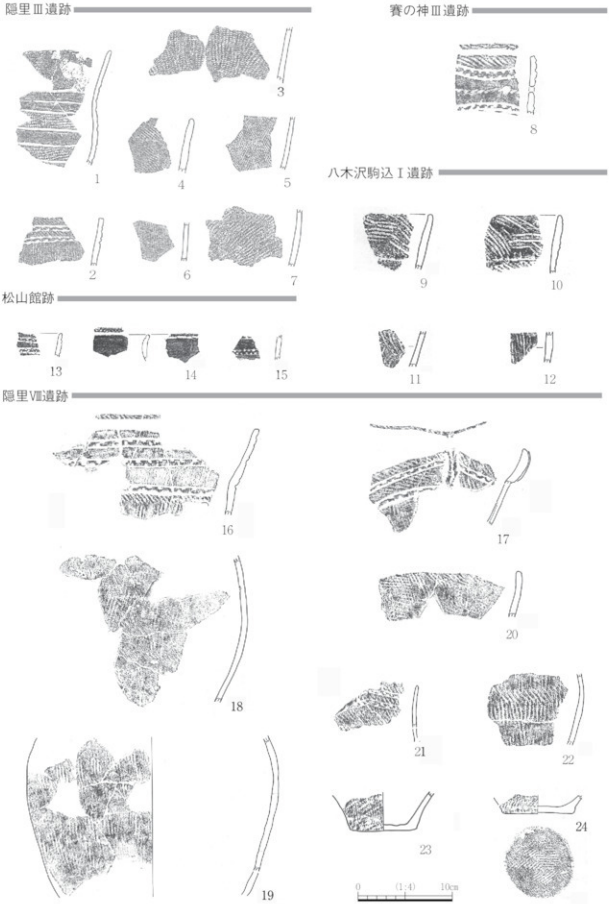
その後、居住域としてこの尾根上が利用されるのは弥生時代後期である。この間何百年、居住域として利用されなかった理由は不明であるが、周辺の遺跡の集落とも併せて考える必要がある。今回調査した弥生時代後期の竪穴住居跡２棟はいずれも平面方形である。出土土器から弥生時代後期と想定したが、土器は天王山式・赤穴式・湯舟沢式といった型式の特徴を有する。土器については次項で詳細を述べるが、県内においてこの時期の集落の調査例が少ないため非常に貴重な成果となった。２棟の竪穴住居跡はいずれも尾根２の頂部に位置し、傾斜を持ち尾根が細く括れる地点から尾根幅が広がったより西側に位置する。しかしながら、尾根幅は平らな台地に比べると細く狭いため竪穴住居は尾根幅いっぱいを利用して作られている。また、竪穴住居跡１は４隅に柱穴が配されており、比較的しっかりとした上屋があったことが想定される。このような尾根上での日常生活を想定した場合、水田耕作をおこなっている集団とは思えない。よって、尾根頂部での暮らしぶりは縄文時代より連綿と続く生活基盤の上に成り立っていたものと考えられる。ただし、土製紡錘車を保有していることを考えると、まったく旧態依然の生活ではなく、それなりの変容を遂げたものであったのであろう。

居住域としての利用以外に狩猟域として利用された経歴があるようである。これは尾根１に９基の溝状陥し穴が分布することから推測できる。溝状の陥し穴は尾根筋に沿って、尾根頂部に立地する。その分布は北へ延びる尾根１に限定されており、狩猟域がこの尾根筋を中心に策定されていたことが

窺える。さらに、それぞれ一定間隔を設けて作られていることから同期間に作られたものであると考えられる。尾根筋に沿っている軸方向であることは、斜面から尾根を横切って移動する獲物を狙ったと考えられるが、現在周辺を闊歩するカモシカの動きは等高線に沿ったものであるように思える。したがって、想像の域を出ないが、ある程度追い込みをおこない、獲物の通常とは異なる動きを作り出し、捕獲したものと思われる。時期は不明であるが、竪穴住居跡３と近接するものが１基存在するため縄文時代中期末頃以外の時期であると想像できる。形状や埋土の様子から推測すると縄文時代中期以降のものである可能性が考えられる。

（2）弥生土器の基礎分析

木戸井内Ⅵ遺跡では、竪穴住居跡１・２およびその周辺より弥生時代後期の土器が比較的まとまって出土した。その特徴からこれらはいわゆる天王山式、赤穴式、湯舟沢式などと呼称される土器群の範疇に収まるものと考えられる。土器は口縁部を中心に沈線と交互刺突文によって装飾されている。前章でも触れた通り、複数個体認められるが、それぞれ施文方法に差異が認められる点を今一度強調しておきたい。これら差異がそのまま時期差あるいは型式学的変化に関係するものかどうか不明であるが、周辺遺跡で出土した資料も合わせて検討する。第23図は木戸井内Ⅵ遺跡周辺で出土した弥生時代後期の土器（１～24）を集めたものである。木戸井内Ⅵ遺跡の周辺では複数の遺跡で弥生時代後期に帰属するとみられる土器が出土している。遺跡は隠里Ⅲ遺跡、赛の神Ⅲ遺跡、八木沢駒込Ⅰ遺跡、松山館跡、隠里Ⅶ遺跡の５遺跡であり、特に隠里Ⅲ・隠里Ⅶ遺跡は木戸井内Ⅵ遺跡に近在する。これらのうち交互刺突文を有するものは２・８・13・15・16・17・21である。いずれの交互刺突文も基本的には上下２条の沈線にそれぞれ付加されるが、刺突文は施文方法および痕跡に違いが認められる。13・15は松山館跡出土の破片であるが、交互刺突文と言いながらも上下の刺突が交互に配されていない。その他の資料は一応交互に配置されているが、器面に対して正面からの連続刺突と斜め方向からの連続刺突に分けることができる。15が正面からに連続刺突（以下、正面刺突と呼ぶ）であり、それ以外の土器は斜め方向からの刺突（以下、斜め刺突と呼ぶ）を基本としている。斜め方向の刺突は上下でそれぞれ向きを揃え、上の列はそれぞれ同じ方向から、下の列はその逆向きから刺突されることが基本のようである。なお、21は区画となる沈線がか細く弱いうえに、交互刺突文も非常に小さく粗い。ただし、刺突文は上下で方向に統一性が認められ、上下が交互にかみ合うような意識は認められる。このような文様属性は時間的な差異を反映するものである可能性も考えられるが、この土器の器壁が他の土器に比べ非常に薄いことを見逃してはならない。この薄さは土器そのものが非常に小さい器種であることを示しており、そのため文様も粗雑で弱いタッチの意匠となっていることが考えられる。今回出土して得られた土器片も正面刺突と斜め刺突とに分けられ、圧倒的に後者が多い。これらが時間差を示す属性である可能性も考えられるが、現段階では明確な判断はできない。しかし、これらこの時期の土器に特徴的な交互刺突文であるため今後も検討が必要である。次に交互刺突文と口唇部の縄文原体圧痕との関係性において若干触れておく。集成した周辺遺跡出土の土器においても今回出土した土器にも多く認められるが、大半は交互刺突文が口縁部直下に配されている土器の口唇部にはほとんど原体圧痕が認められる。一方、大半が破片であるが、口唇部が残存している土器片のうち、地文しか認められないものについては原体圧痕が認められない場合が多い。すなわち、この時期の土器について精製・粗製があるとするならば、前者の口唇部には原体圧痕が施されるが、後者には施されないという暗黙のルールが存在していた可能性が考えられる。この属性についても今後注視する必要があるが、現段階では粗精の別による使い分けで時間差を示すものではないと推察される。



第23図　周辺遺跡出土弥生後期の土器集成

2　磯鶏石崎遺跡

A地区では古代の竪穴住居と思われる遺構を4基検出した。これまで述べた通り、検出した段階で調査中止となり、遺構埋土の掘削はおこなっていない。したがって、詳細な時期、住居内の様子などは不明なままである。しかし、周辺で出土した土器が8世紀後半のものであることから、この頃を中心とする時期に営まれた集落である可能性が高い。

3　ま　と　め

今回調査した木戸井内Ⅵ遺跡と磯鶏石崎遺跡は縄文時代中期を皮切りに、その後も人々の活動の痕跡が認められた。

今回特に大きな成果であったのは、木戸井内Ⅵ遺跡の調査で検出した弥生時代後期の竪穴住居跡と出土土器である。沿岸を含め岩手県では調査例が少なく、特に平面方形の竪穴住居跡は数少ない。出土土器は内陸にある湯舟沢遺跡出土土器の特徴も有しており、岩手県内に広く分布する土器の特徴を備えている。しかし、これらを有する竪穴住居跡は円形を基調とするものが大半であることから、東北地方南部の竪穴住居跡の特徴と東北地方北部の土器が共伴する事例として興味深い。今後、類例の増加によって詳細な分布状況が判明することに期待したい。

また、磯鶏石崎遺跡では尾根上に古代の竪穴住居跡が存在することが判明した。遺構は検出したのみでその内容については不明であるが、古代の集落立地等を考えるうえで重要なものである。

（福島）

引用・参考文献

小田野哲憲　1987　「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』5
石川日出志　2001　「弥生後期湯舟沢式土器の系譜と広がり」『北越考古学』12
石川日出志　2004　「弥生後期天王山式土器成立期における地域関係」『駿台史學』120
石川日出志　2000　「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』11
日下　和寿　2000　「岩手県における弥生後期の土器編年」『第9回東日本埋蔵文化財研究会東日本弥生時代後期の土器編年』
木村　高　2007　「天王山式期から赤穴式期にかけての土器様相」『村越潔先生喜寿記念論集』
斎藤邦雄　1993　「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学』5
相原淳一　2002　「天王山式土器成立期に関する層位学的再検討」『宮城考古学』4
伊藤信雄　1974　「第四章　弥生文化」『水沢市史』第1巻
奥山　潤　1963　「北秋田郡北部の弥生終末の土器」『秋田考古学』23
佐藤　剛　1998　「北海道出土の「いわゆる赤穴式掘」について」『北方の考古学』6
（以下）財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター埋蔵文化財調査報告書
2009　『第529集　木戸井内Ⅳ遺跡・隠里Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
2009　『第530集　賽の神Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
2010　『第552集　隠里Ⅶ遺跡発掘調査報告書』
2011　『第574集　八木沢駒込1遺跡発掘調査報告書』
2014　『第625集　松山館跡発掘調査報告書』

附編　放射性炭素年代測定

木戸井内Ⅵ遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）

1　測定対象試料

木戸井内Ⅵ遺跡は、岩手県宮古市松山第7地割1-1ほか（北緯39°37′27″、東経141°55′21″）に所在し、丘陵上に立地する。測定対象試料は、竪穴住居跡や土坑から出土した炭化物5点である（表1）。

竪穴住居跡SI01では、埋土上層に土器（弥生時代後期天王山式）と炭化物が集中、埋土最下層には炭化物が散在していた。この埋土上層からKDNⅥ-1、埋土最下層からKDNⅥ-2が採取された。SI03は大木９式期の竪穴住居跡と考えられているが、出土遺物が少ない。製炭土坑と考えられるSW01、SW02では、遺構の時期を特定するための材料が皆無である。

2　測定の意義

SI01は岩手県沿岸部で稀少な事例である。またSI03、SW01、SW02は時期を判断するための手がかりが乏しい。このため、出土炭化物の年代測定によって遺構の年代を検討する。

3　化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

(6) グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

(1) δ 13Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正

した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差(±1σ)は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1σ=68.2%)あるいは2標準偏差(2σ=95.4%)で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下1桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の^{14}C年代は、KDNVI-1が1900±20yrBP、KDNVI-2が1830±20yrBP、KDNVI-3が3920±30yrBP、KDNVI-4が1030±20yrBP、KDNVI-5が1240±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)を検討すると、SI01のKDNVI-1とKDNVI-2の間にやや年代差が見られるものの、2点とも弥生時代後期頃に相当する値を示し、出土土器の型式に整合する(小林2009)。KDNVI-3は縄文時代後期初頭頃に相当する値となっており(小林編2008)、推定される大木9式期より新しい。SW01のKDNVI-4は992～1020cal ADの範囲、SW02のKDNVI-5は694～859cal ADの間に4つの範囲で示される。

なお、KDNVI-1、KDNVI-2が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾嵜2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いてこれらの測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

(株式会社　加速器分析研究所)

表1　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC (%)
IAAA-142779	KDNⅥ-1	SI01　埋土上層	炭化物	AAA	-26.52±20	1,900±20	78.91±20
IAAA-142780	KDNⅥ-2	SI01　埋土最下層	炭化物	AAA	-24.66±20	1,830±20	79.61±20
IAAA-142781	KDNⅥ-3	SI03石囲炉内　埋土下層	炭化物	AAA	-24.31±20	3,920±20	61.41±20
IAAA-142782	KDNⅥ-4	SW01　埋土下層	炭化物	AAA	-24.96±20	1,030±20	87.92±20
IAAA-142783	KDNⅥ-5	SW02　埋土最下層	炭化物	AAA	-19.28±20	1,240±20	85.73±20

[#7097]

表2　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)	(yrBP)		
IAAA-142779	1,930±20	78.66±0.22	1,902±23	78calAD - 126calAD (68.2%)	29calAD - 38calAD (0.9%) 51calAD - 140calAD (92.4%) 155calAD - 168calAD (1.0%) 195calAD - 208calAD (1.1%)
IAAA-142780	1,830±20	79.67±0.22	1,831±22	139calAD - 216calAD (68.2%)	128calAD - 239calAD (95.4%)
IAAA-142781	3,910±30	61.50±0.20	3,916±26	2469calBC - 2431calBC (27.4%) 2424calBC - 2402calBC (16.5%) 2381calBC - 2348calBC (24.3%)	2475calBC - 2335calBC (91.3%) 2324calBC - 2305calBC (4.1%)
IAAA-142782	1,030±20	87.92±0.25	1,034±23	2424calBC - 2402calBC (16.5%)	975calAD - 1029calAD (95.4%)
IAAA-142783	1,140±20	86.74±0.24	1,236±23	694calAD - 747calAD (41.7%) 763calAD - 778calAD (12.3%) 792calAD - 804calAD (6.5%) 843calAD - 859calAD (7.7%)	688calAD - 780calAD (59.8%) 787calAD - 876calAD (35.6%)

[参考値]

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

小林謙一　2009　近畿地方以東の地域への拡散，西本豊弘編，新弥生時代のはじまり　第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，55-82

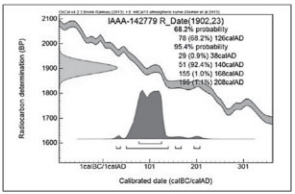
小林達雄編　2008　総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

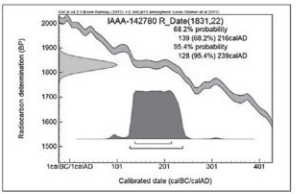
尾嵜大真　2009　日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代，設楽博己，藤尾慎一郎，松木武彦編弥生時代の考古学1　弥生文化の輪郭，同成社，225-235

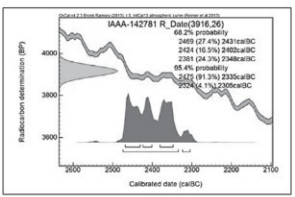
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

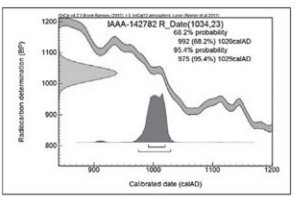
坂本　稔　2010　較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－，第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集，（株）加速器分析研究所，85-90

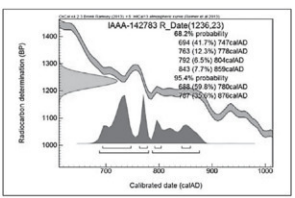
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363











[図版]暦年較正年代グラフ(参考)

磯鶏石崎遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

1　測定対象試料

磯鶏石崎遺跡は、岩手県宮古市松山第７地割１-１ほか（北緯39°38′00″、東経141°57′44″）に所在し、丘陵状に立地する。測定対象試料は、製炭土坑と考えられるSW01出土木炭１点である（表１）。

2　測定の意義

遺構の時期を特定するための材料が皆無であるため、出土木炭の年代測定によって遺構の時期を検討する。

3　化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol／ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

(6) グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

(1) δ13Cは、試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（$\pm 1\sigma$）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表

1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1σ=68.2%)あるいは2標準偏差(2σ=95.4%)で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下1桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6　測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料SOI-1の^{14}C年代は2140±20yrBP、暦年較正年代(1σ)は弥生時代中期頃に相当する(小林2009)。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

(株式会社　加速器分析研究所)

表1　放射性炭素年代測定結果(δ^{13}C補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC (%)
IAAA-142784	SOI-1	SW01　検出面	木炭	AaA	-23.85±0.24	2,140±20	76.59±0.22

[#7097]

表2　放射性炭素年代測定結果(δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代)

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-142784	2,120±20	76.77±0.22	2,142±23	342calBC - 326calBC (9.4%) 205calBC - 161calBC (50.6%) 131calBC - 118calBC (8.2%)	351calBC - 300calBC (18.2%) 227calBC - 224calBC (0.4%) 211calBC - 92calBC (76.8%)

[参考値]

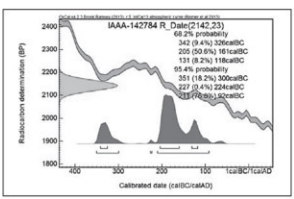
文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

小林謙一　2009　近畿地方以東の地域への拡散，西本豊弘編，新弥生時代のはじまり　第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，55-82

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



［図版］暦年較正年代グラフ（参考）

測定結果を受けて

今回委託した年代測定結果について調査担当者の所見を述べる。

まず、木戸井内Ⅵ遺跡で調査中に採取した炭化物試料５点は、本編の記載では報告時の遺構名となっており、以下の通り読み換えていただきたい。

試料名：KDNⅥ-１・・・竪穴住居跡１埋土上層採取炭化物
試料名：KDNⅥ-２・・・竪穴住居跡１埋土最下層採取炭化物
試料名：KDNⅥ-３・・・竪穴住居跡３埋土下層採取炭化物
試料名：KDNⅥ-４・・・炭窯１埋土下層採取炭化物
試料名：KDNⅥ-５・・・炭窯２埋土最下層採取炭化物

採取者は測定にノイズが入ることのないようにサンプルを採取し、状態の良いものを軽く水洗して測定者に渡した。測定も炭素含有率は十分満たしているとのことであり、おおむね信頼性の高い結果が得られたのではないかと考えている。測定者が測定結果で述べている通り、KDNⅥ-１とKDNⅥ-２は竪穴住居１採取の試料で弥生時代後期の年代が得られた。この時期の測定試料が県内では少数であるためにわかには判断できないが､出土した土器は得られた結果の範囲の年代である可能性が高い。特に、前者は土器の集中出土部分で得られた試料であるためより土器の廃棄年代に近い可能性が考えられる。次にKDNⅥ-３は結果として縄文時代後期初頭頃に相当するという結果が報告された。これを受け、改めて遺構・遺物を再検証するといくつかの点に気付くことができた。一つは遺構の特徴である。当該試料の出所である竪穴住居跡３は石囲炉を有するが、住居中央に配されておらず、北西方向に寄った配置である。また、複式炉の形態はとっておらず、前庭部も確認できなかった。柱穴配置も炉の軸線と平面的な配置とを意識していることがわかる。以上のことから、複式炉から次の段階へ移り変わる過渡期である可能性が考えられる。そうであれば、測定結果である縄文時代後期初頭頃という年代観は強ちおかしな値ではないかもしれない。次に土器であるが、微細な破片であるため全体形状が判明するものがない。しかし、第18図で示した50・52・54・56・58などは大木９式期のものより少し新しい方への幅を持たせてもいいかもしれない。特に50の刺突を有する破片は大木10式期の土器である可能性も残した方がいいかもしれない。以上のことを再度考慮に入れると竪穴住居跡３は縄文時代中期後葉～後期初頭と見直すことができる。残る二つの試料はいずれも炭窯の試料である。KDNⅥ-４は炭窯にしてはあまりにも古い値であるため、炭化物の集中等で炭窯と考えたが、それ以外の土坑等である可能性も考えられる。KDNⅥ-５については古代の年代値であるため、炭窯である可能性が高い。

磯鶏石崎遺跡の試料は当初炭窯と考えた遺構採取であるが、この遺構は諸々検討した結果炭窯の可能性が低いことから本編では土坑１と改称した。結果は弥生時代中期という結果が得られたが、土坑周辺から弥生時代中期～後期の土器片が１点出土しており、これが帰属する遺構であった可能性も考えられる。しかし、その他情報不足であるため明確なことを述べることはできない。今後周辺の遺跡でまとまった資料が得られることで再検証する必要がある。

（福島）

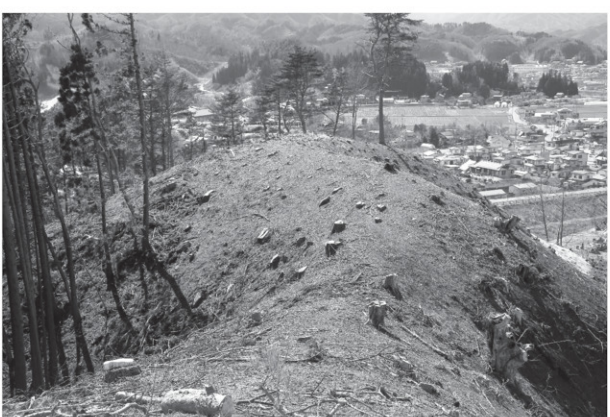
写　真　図　版

直上（写真上が南）

斜め方向（南から）

写真図版１　航空写真【木戸井内Ⅵ遺跡】

調査前の尾根１（南東から）



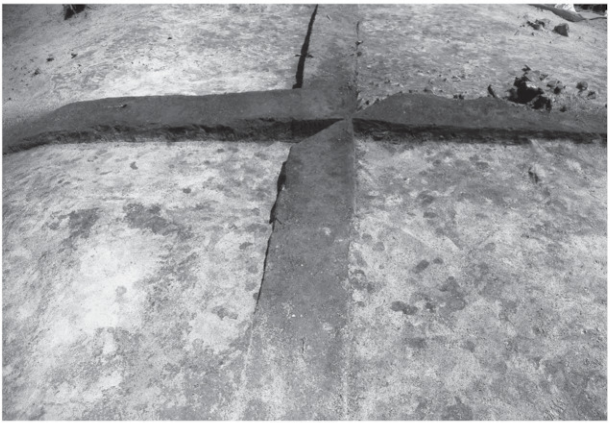
調査前の尾根２（東から）

写真図版２　調査前現況【木戸井内Ⅵ遺跡】

全景（東から）

断面（南西から）

写真図版３　竪穴住居跡１【木戸井内Ⅵ遺跡】



断面（西から）

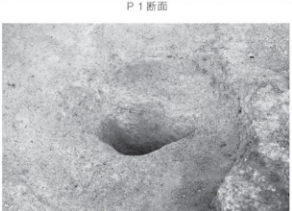
断面（南東から）

写真図版４　竪穴住居跡１【木戸井内Ⅵ遺跡】

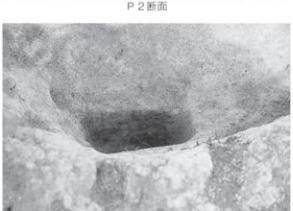
土製紡錘車出土状況

P１断面

P２断面



P３断面



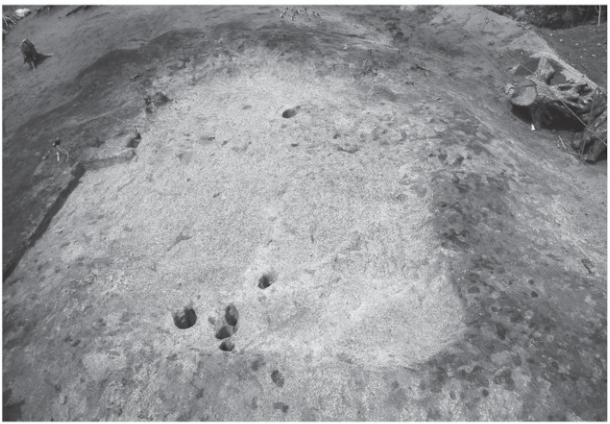
P４断面

写真図版５　竪穴住居跡１【木戸井内Ⅵ遺跡】

下層断面

下層断面

写真図版６　竪穴住居跡１【木戸井内Ⅵ遺跡】



全景

断面

写真図版７　竪穴住居跡２【木戸井内Ⅵ遺跡】

全景

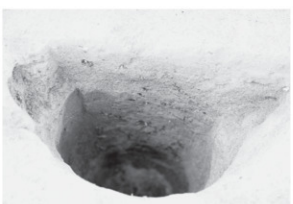
断面

写真図版８　竪穴住居跡３【木戸井内Ⅵ遺跡】

石囲炉全景

石囲炉断面

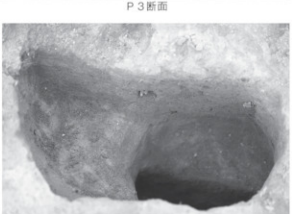
P１断面



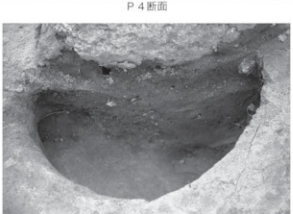
P２断面

P３断面

P４断面



P５断面



P６断面

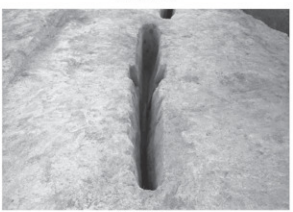
写真図版９　竪穴住居跡３【木戸井内Ⅵ遺跡】

貯蔵穴１全景

貯蔵穴１断面

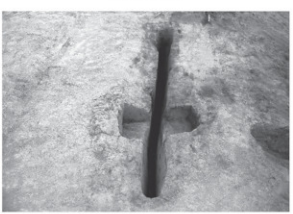
陥し穴１全景

陥し穴１断面



陥し穴２全景

陥し穴２断面



陥し穴３全景

陥し穴３断面

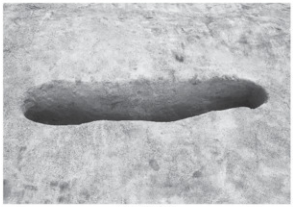
写真図版10　貯蔵穴１、陥し穴１～３【木戸井内Ⅵ遺跡】

陥し穴４全景

陥し穴４断面

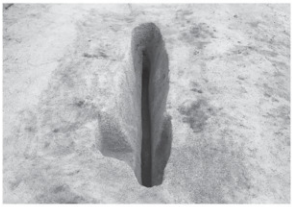
陥し穴５全景

陥し穴５断面



陥し穴６全景

陥し穴６断面



陥し穴７全景

陥し穴７断面

写真図版11　陥し穴４～７【木戸井内Ⅵ遺跡】

陥し穴８全景

陥し穴８断面

陥し穴９全景

陥し穴９断面

炭窯１全景

炭窯１断面

炭窯２全景

炭窯２断面

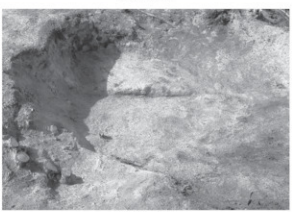
写真図版12　陥し穴８・９、炭窯１・２【木戸井内Ⅵ遺跡】

炭窯３全景

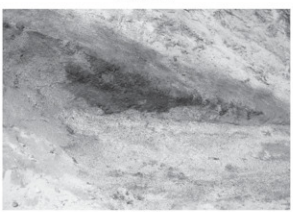
炭窯３断面

炭窯４全景

炭窯４断面



炭窯５全景



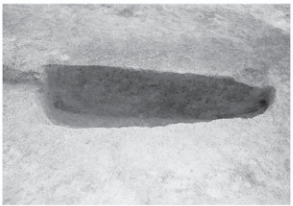
炭窯５断面

炭窯６全景

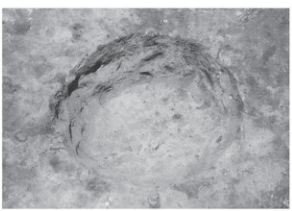
炭窯６断面

写真図版13　炭窯３～６【木戸井内Ⅵ遺跡】

土坑１全景

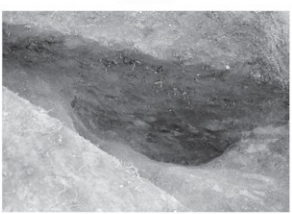


土坑１断面

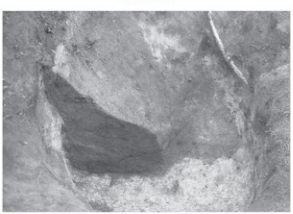


土坑２全景

土坑２断面



土坑３上層断面



土坑３下層断面

土坑３全景

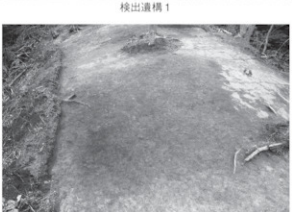
現地公開風景（尾根２）

写真図版14　土坑１～３、現地公開風景【木戸井内Ⅵ遺跡】

A 地区全景

検出遺構 1

検出遺構 2



検出遺構 3

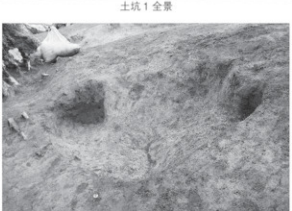
検出遺構 4

写真図版15　A地区【鏡鶏石崎遺跡】

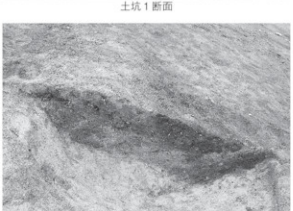
A 地区全景

土坑 1 全景

土坑 1 断面

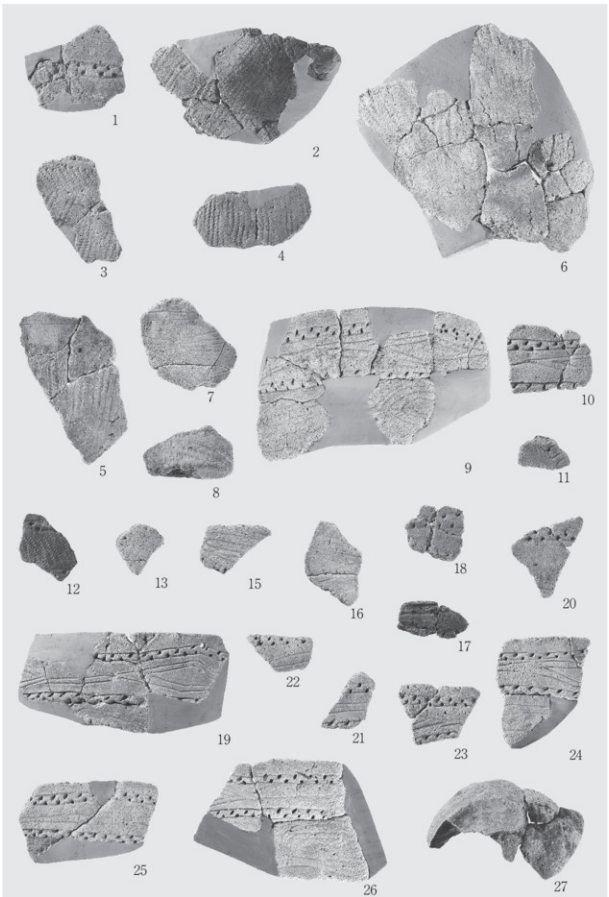


土坑 2 全景



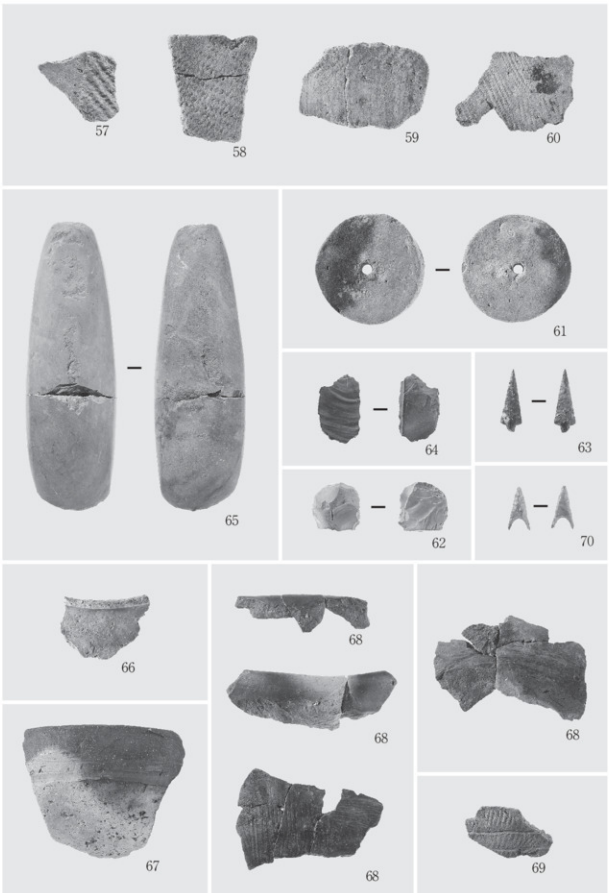
土坑 2 断面

写真図版16　B地区【鞭鴎石崎遺跡】



写真図版17　出土遺物１～27【木戸井内Ⅵ遺跡】

写真図版18　出土遺物28～58【木戸井内Ⅵ遺跡】



写真図版19　出土遺物57～66【木戸井内Ⅵ遺跡】、出土遺物67～70【磯鶏石崎遺跡】

報告書抄録

ふりがな	きどいない6いせき・そけいいしざきいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	木戸井内Ⅵ遺跡・磯鶏石崎遺跡発掘調査報告書
副書名	宮古西道路建設関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第659集
編著者名	福島正和
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL（019）638－9001
発行年月日	2016年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
木戸井内Ⅵ遺跡	宮古市松山第7地割1－1ほか	03202	LG33-2149	39度37分27秒	141度55分21秒	2014.4.10～2014.5.27	3,240	宮古西道路建設事業
磯鶏石崎遺跡	宮古市磯鶏第1地割石崎地内	03202	LG34-1048	39度38分00秒	141度57分44秒	2014.5.23～2014.6.30	618	宮古西道路建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木戸井内Ⅵ遺跡	集落	縄文時代 中期 弥生時代 古代以降	竪穴住居跡　1 貯蔵穴　1 陥し穴　10 竪穴住居跡　2 炭窯	縄文土器・石器 弥生土器 土製紡錘車	弥生時代後期（天王山式・赤穴式土器）出土。
磯鶏石崎遺跡	集落	古代 時期不明	竪穴住居跡　4 土坑　2	土師器	事業の設計変更のため一部遺構検出までを記録保存。

要約

木戸井内Ⅵ遺跡は丘陵上に立地し、狭い尾根上に縄文時代中期の竪穴住居跡1棟、弥生時代後期の竪穴住居跡2棟を検出した。弥生時代の竪穴住居跡からは天王山式または赤穴式と考えられる土器が出土し、土製紡錘が共伴している。県内では比較的珍しい時期の住居であり、特に方形の平面形態を有するため東北地方南部との関係が注目される。

磯鶏石崎遺跡は宮古湾に近い丘陵上に立地している。調査区はA地区・B地区に分かれて設定されており、A地区では古代の竪穴住居跡群を検出したが、調査途中で事業の設計変更が生じ、検出した状況までの記録保存をおこなった。B地区では時期不明の土坑2基を調査した。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第659集
木戸井内Ⅵ遺跡・磯鶏石崎遺跡発掘調査報告書
宮古西道路建設関連遺跡発掘調査

印　刷　平成28年3月14日
発　行　平成28年3月18日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001

発　行　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027－0029　岩手県宮古市藤の川4番1号
電話（0193）71－1716
（公財）岩手県文化振興事業団
〒020－0023　岩手県盛岡市内丸13番1号
電話（019）654－2235

印　刷　有限会社小松茂印刷所
〒020－0024　岩手県盛岡市大沢川原二丁目5－37
電話（019）623－6073

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2016